兵庫県文化財調査報告　第 472 冊

姫路市

丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅲ

－　(都)網干線外街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 27(2015)年 3 月

兵庫県教育委員会

姫路市

丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅲ

－　（都）網干線外街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 27（2015）年３月

兵庫県教育委員会

例　言

1　本書は姫路市に所在する丁・柳ヶ瀬遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は(都)網干線外街路整備事業に伴うもので、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所の依頼に基づき、現地調査は兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　調査の推移

（発掘作業）

確 認 調 査　平成 24 年 1 月 30 日

平成 24 年 12 月 4 日

実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成 25 年 1 月 17 日～平成 25 年 3 月 5 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

工事請負：有限会社　上山建設

（出土品整理作業）

平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 25 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　鐵英記・久保弘幸が担当した。

5　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会(兵庫県立考古博物館)で保管している。

6　遺跡のポール撮影および図化作業については株式会社サンコムに委託して実施した。

7　本書に掲載した遺物写真については、株式会社クレアチオに委託して撮影した。

8　出土土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

9　本調査の期間、および本書の執筆・編集にあたっては下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい(順不同・敬称略)。

小川　弦太　　中川　猛　　大本　朋弥

目　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　調査に至る経緯
第２節　確認調査
第３節　本発掘調査
第４節　出土品整理作業

第２章　地理的・歴史的環境 …… 5
第１節　地理的環境
第２節　歴史的環境

第３章　遺構と遺物 …… 9
第１節　遺構
第２節　遺物
第３節　小結

第４章　科学分析 …… 21
丁・柳ヶ瀬遺跡出土弥生土器および縄文土器の胎土分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）

第５章　総　括 …… 24

抄録

図版目次

図版１　１区　平面図・断面図
図版２　２区　平面図・断面図
図版３　１区　遺構図（１）
図版４　１区　遺構図（２）
図版５　１区　遺構図（３）
図版６　１区　遺構図（４）
図版７　１区　遺構図（５）・２区　遺構図
図版８　出土遺物　土器・陶磁器（１）
図版９　出土遺物　土器・陶磁器（２）
図版10　出土遺物　土器・陶磁器（３）
図版11　出土遺物　石器・石製品

写真図版目次

写真図版１　遺構１区　全景（東から）／全景（西から）
写真図版２　遺構１区　西部　遺構（北から）／１区中央部　遺構（北から）
写真図版３　遺構１区　柱穴（１）
写真図版４　遺構１区　柱穴（２）
写真図版５　遺構１区　柱穴（３）
写真図版６　遺構１区　柱穴（４）
写真図版７　遺構１区　柱穴（５）
写真図版８　遺構１区　柱穴（６）
写真図版９　遺構１区　柱穴（７）・土坑・溝
写真図版10　遺構２区　上層遺構面全景（北から）／上層遺構面部分（北から）
写真図版11　遺構２区　下層遺構面全景（北から）／下層遺構面部分（北から）
写真図版12　遺構２区　溝・土坑・遺物出土状況
写真図版13　遺物　土器（１）
写真図版14　遺物　土器（２）
写真図版15　遺物　土器（３）
写真図版16　遺物　土器（４）
写真図版17　遺物　土器（５）
写真図版18　遺物　石器・石製品

挿図目次

第１図　ポール撮影　状況
第２図　現地説明会風景
第３図　遺跡位置図
第４図　調査地点位置図
第５図　周辺の遺跡分布図

表　目　次

第１表　出土土器一覧表（１）
第２表　出土土器一覧表（２）
第３表　ガラスビード作成条件
第４表　蛍光Ｘ線装置条件
第５表　蛍光Ｘ線定量測定条件
第６表　蛍光Ｘ線分析結果（化学組成）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

都市計画道路網干線は JR 山陽線の北側を走る姫路市広畑区才から揖保郡太子町船代を連絡する東西方向の幹線街路であり、昭和 32 年に都市計画決定されたものである。このたび、南北方向の交通渋滞の緩和などを目的に太市線と交差する勝原交差点を中心とした部分が整備されることとなった。

事業が計画された勝原交差点周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地である「丁、柳ヶ瀬遺跡」の範囲に当たっているため、平成 23 年度と平成 24 年度に確認調査を実施し、その結果に基づいて平成 24 年度に本発掘調査を実施した。なお、「丁、柳ヶ瀬遺跡」については、本事業に係る調査も含め、数次にわたる調査が過去にも行われており、それについては『丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ』(兵庫県教育委員会：平成 21 年３月)でまとめられている。

なお、遺跡名は現在「丁、柳ヶ瀬遺跡」となっているが、本書ではこれまでの報告との整合もあるため、「丁・柳ヶ瀬遺跡」と表記している。

第２節　確認調査

事業対象範囲について、平成 23 年度と平成 24 年度の 2 度に分けて兵庫県立考古博物館により確認調査が実施された。その結果、事業範囲の北端を除いて、遺構・遺物が検出されたため、本発掘調査が必要と判断された。

調 査 番 号　2011323
調 査 期 間　平成 24 年 1 月 30 日
調 査 面 積　6 ㎡
調査担当者　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部　企画調整課　　平田　博幸

調 査 番 号　2012158
調 査 期 間　平成 24 年 12 月 4 日
調 査 面 積　4 ㎡
調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財課　　中村　弘

第３節　本発掘調査

確認調査の結果に基づき、平成 24 年度に公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターが兵庫県教育委員会の委託により本発掘調査を実施した。詳細は本書で報告しているが、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が検出された。

調査区が狭小のため、ポール撮影による写真測量を実施した。平成 25 年 2 月 23 日に地元対象の説明会を実施した。

第１図　ポール撮影　状況

本発掘調査

調 査 番 号　2012157

調 査 期 間　平成25年１月17日～平成25年３月５日

調 査 面 積　167㎡

調査担当者　公益財団法人　兵庫県まちづくり技術センター

埋蔵文化財調査部

調査第１課　　久保　弘幸　　鐵　英記

第２図　現地説明会風景

第４節　出土品整理作業

平成26年度に遺物の洗浄、接合・補強、実測、写真撮影、レイアウトを実施した。分析・鑑定としては出土土器の胎土分析を実施し、報告書を刊行した。

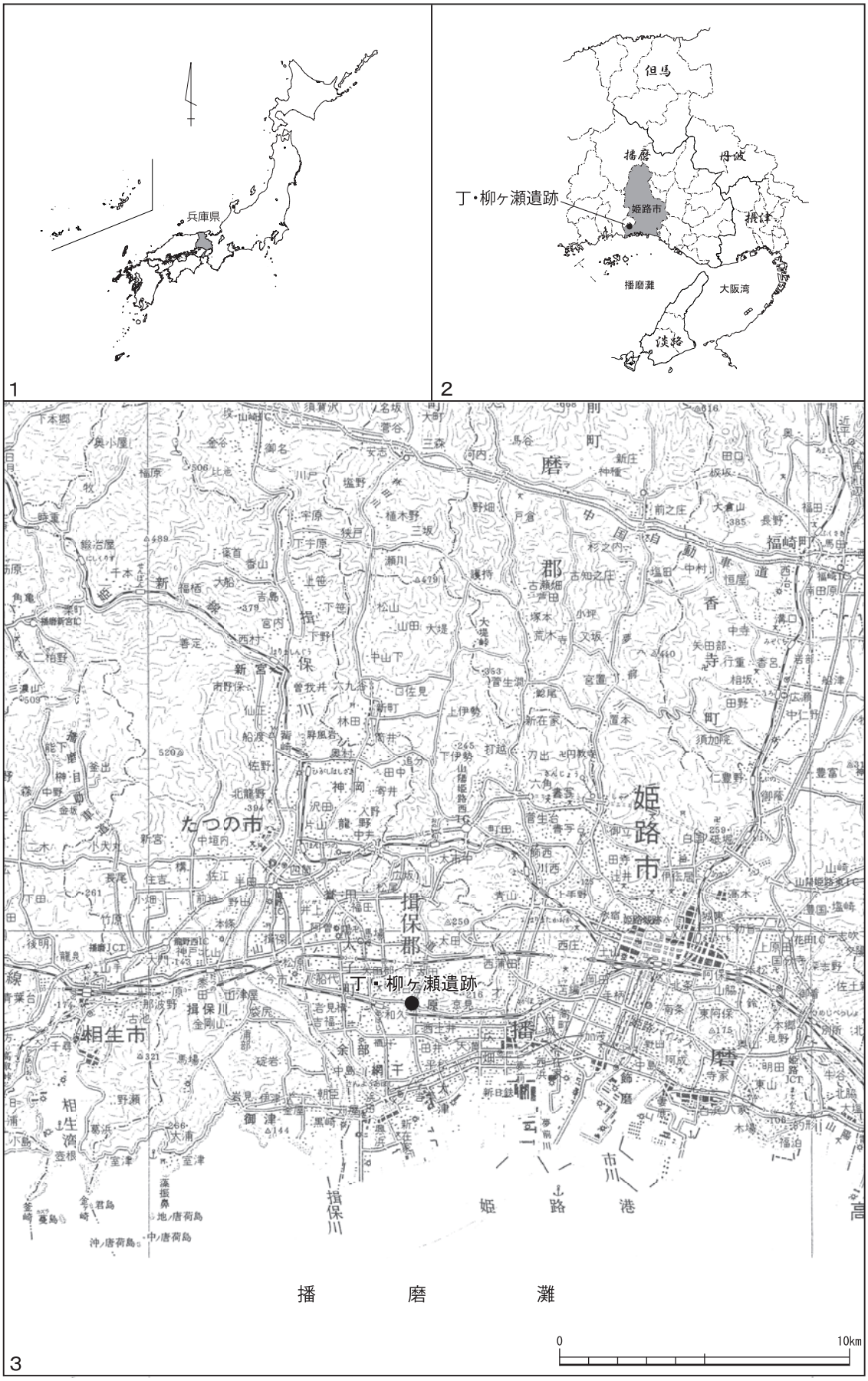
整理担当者　調査第２課　　久保　弘幸　　鐵　英記

整理保存課　　菱田　淳子　　長濱　誠司　　岡本　一秀

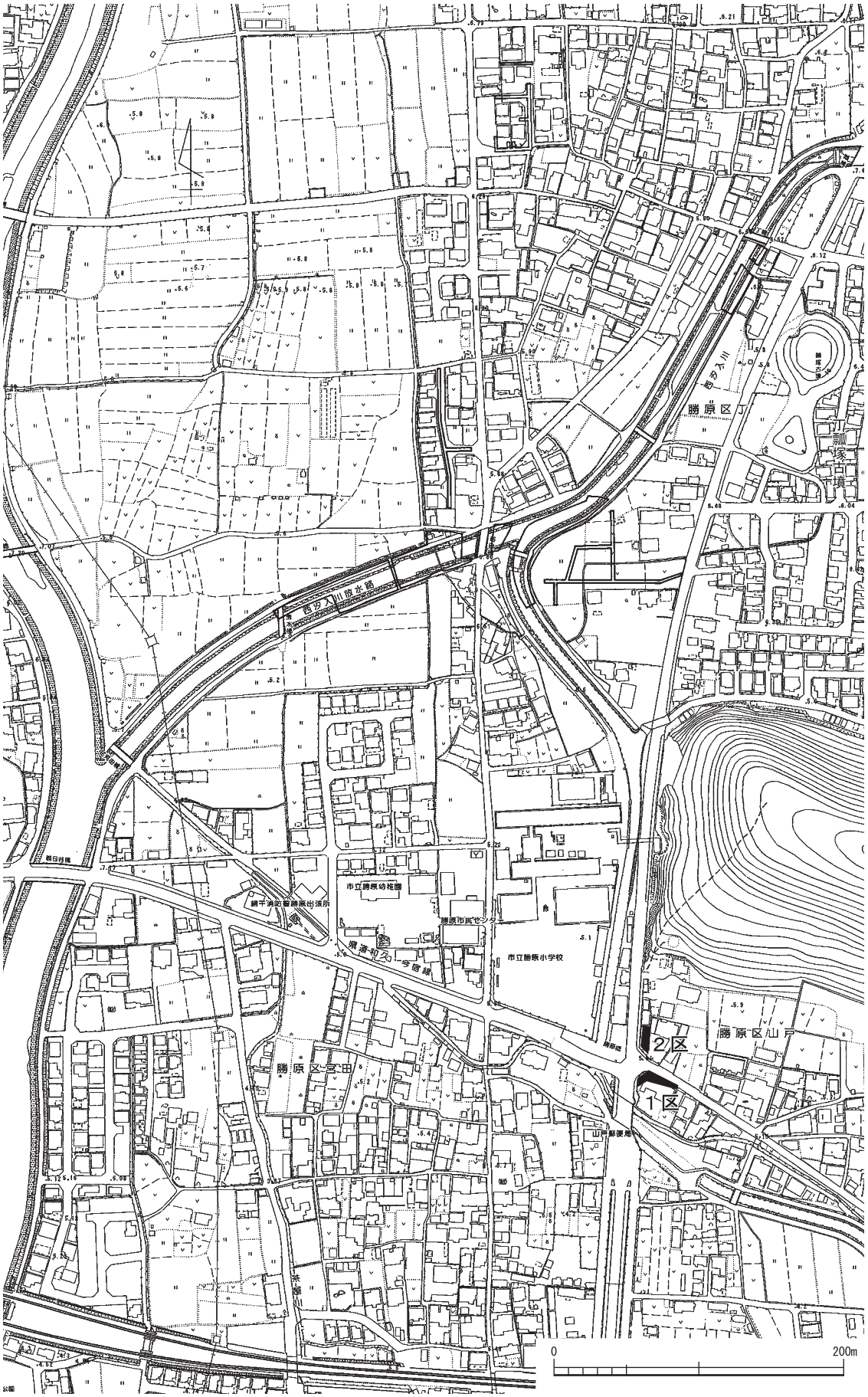
荻野　麻衣　　小野　潤子　　平宮可奈子　　上西　淳子　　沼田眞奈美

柏原　美音　　宮田　麻子　　杉村　明美　　寺西　梨沙　　古谷　章子

佐々木誓子



第３図　１．兵庫県の位置　２．姫路市の位置　３．丁・柳ヶ瀬遺跡の位置（1/200,000）



第４図　丁・柳ヶ瀬遺跡の本発掘調査区と既往の調査区の位置（1/4,000）

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

丁・柳ヶ瀬遺跡が所在する姫路市は兵庫県の中西部に位置し、北は神崎郡、北東は加西市、東は加古川市と高砂市と接し、南は家島群島を含んで瀬戸内海に面する。西はたつの市と揖保郡太子町、北西は宍粟市に接し、旧播磨国の中心を占める立地となっている。遺跡が所在する姫路市勝原区丁は市域の中でも西端で、遺跡は大津茂川流域の左岸に位置する。

地形的にみると姫路市域の大半は播磨平野の低平地にある。播磨平野は播但高原から西に続く中国山地に源を持つ複数の河川が作り出した沖積平野である。丁・柳ヶ瀬遺跡の所在する市域西部は隣接する揖保郡太子町域も含め、揖龍平野と呼称され、中国山地の東端にあたる播但山地を大きく開析して南流する揖保川、林田川および独立した小規模河川である大津茂川の流域に含まれている。

揖保川下流左岸には馬山・壇特山・朝日山などの基盤岩の突出が認められる。これらの独立丘陵は流紋岩の山塊が揖保川本流の堆積作用により埋没したために生まれた地形である。大津茂川の河谷は、これらの独立丘陵によって本流の影響を受けず、埋没を免れたものと考えられる。

揖保川左岸から大津茂川周辺の低地は大きく分類して二つの地形面が認められる。低位のものは現在も地形の形成が続く氾濫原である。他方は洪水のほとんど及ぶことのない完新世段丘面である。丁・柳ヶ瀬遺跡が立地するのはこの完新世段丘面である。

完新世段丘面はさらに細分が可能で、現在の集落や耕作地が立地する微高地と帯状に長く延びる凹地となる旧河道、いずれにも属さない平坦地からなっている。これらのうち旧河道は、ほとんどのものが現在の流路と比べ東向きの網状の流れを有し、太子町川島付近で旧揖保川もしくは旧林田川が大津茂川に合流していた。微高地はこれまでの分類では自然堤防とされてきた部分であるが、大礫～小礫で構成されている場合が多く、中州として形成されたものと考えられる。また、平坦地は小規模な旧河道や旧中州が氾濫堆積物で埋められたものと考えられ、完新世段丘面もかつては扇状地として形成されたものである。

さらに低位の地形面である氾濫原についても、いくつかの細分が可能である。河川の影響のみで形成された自然堤防帯、海と河川が形成に関与した三角州帯、海によって形成された砂堆である。うち、自然堤防帯は完新世段丘面と氾濫原面の境界が形成された後で発達した比較的新しい地形である。海成層の分布は揖保川沿いでは姫路市余部区下余部付近、大津茂川沿いでは姫路市網干区田井付近までとなっている。また、海進にともない低湿地化した場所に堆積したと思われる有機質に富む砂・シルト層は京見山南麓から姫路市勝原区宮田、網干区坂出付近まで広がっており、縄文海進時の海岸線は現在の T.P. 4 ～ 5 m付近に位置していたと考えられ、丁・柳ヶ瀬遺跡の南約 1 キロ付近には湿地帯が形成され、約 1.5 キロ程度南で海にいたったと思われる。このことから、丁・柳ヶ瀬遺跡は海、河川、丘陵の異なった環境帯に囲まれた地点に立地した集落と考えられる。

第２節　歴史的環境

今回の調査で検出された遺構・遺物は旧石器時代から中世にいたるものが含まれている。特に注目すべきものは縄文時代と奈良時代であるが、以下、旧石器時代から中世にいたる周辺遺跡について時代ごとに簡単に述べることとする。

1 丁・柳ケ瀬遺跡　2 丁瓢塚古墳　3 鵤石田遺跡　4 東南遺跡
5 佐田構居跡　6 栗原遺跡　7 立岡笹山遺跡　8 蓮常寺東遺跡
9 矢田部西遺跡　10 矢田部遺跡　11 矢田部城跡　12 壇特山西古墳群
13 原坂遺跡　14 黒岡山古墳　15 黒岡山墳丘墓　16 大津茂川床遺跡
17 郷ノ谷古墳群　18 北山古墳群　19 鷲山古墳群　20 塚村古墳群
21 朝日山遺跡　22 朝日山城跡　23 朝日山古墳群　24 壇特山古墳群
25 壇特山山頂遺跡　26 壇特山遺跡　27 川島遺跡　28 ツクワ遺跡
29 下太田廃寺　30 下太田遺跡　31 薬司古墳　32 丁古墳１号墳
33 丁山頂古墳　34 丁古墳群　35 山戸古墳群　36 山戸４号墳
37 勝山町古墳群　38 茶屋遺跡　39 山戸遺跡　40 南山戸遺跡
41 (仮)高田区整遺跡１地点　42 (仮)高田区整遺跡２地点　43 (仮)高田区整遺跡３地点　44 関ノ口遺跡
45 和久遺跡

第５図　丁・柳ヶ瀬遺跡周辺の遺跡(1/25,000)

旧石器時代

揖保川下流域ではたつの市御津町碇岩遺跡で姶良Tn火山灰より上層で石器ブロックが検出されている。太子町内では山麓部の坊主山遺跡、北山向池遺跡、山田峠遺跡でナイフ形石器、尖頭器が採集されており、当時の遊動的な生業形態を反映しているものと考えられる。揖保川右岸では姶良Tn火山灰が現地表面の浅いところで見かり、当時と現在で地表面に大きな差がないことが判明しており、今後、当該期の遺跡が発見される可能性がある。

縄文時代

縄文時代では草創期、早期の遺跡は現在まで見つかっていない。前期についてはたつの市片吹遺跡で前期末の遺構が検出されており、同遺跡は中期・後期・晩期にかけて継続している。中期になると遺跡数や遺物量が増加していくと考えられ、調査例も増えている。今回報告する姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡（１）もこの時期から営まれ始めるが、良好な調査例としては太子町平方遺跡があり、竪穴住居・土坑・ピットといった遺構が調査され、石棒・石鏃などの石器類や土器が多量に出土している。後期になると遺跡数もさらに増え、太子町東南遺跡（４）、片吹遺跡で竪穴住居を検出しているほか、太子町川島川床遺跡、太子町平方遺跡、太子町城山遺跡、太子町舎利田遺跡でこの時期の遺物が出土している。

晩期は前述した後期の遺跡に加えて、太子町立岡遺跡、太子町助久五反畑遺跡、太子町常前遺跡などで土坑や遺物は見つかっているが、住居跡は検出されておらず、詳細は不明である。

弥生時代

弥生時代は前期後半から始まる丁・柳ヶ瀬遺跡を除けば、前期までさかのぼる遺跡は数少なく、中期初頭から急増する傾向にある。太子町平方遺跡で竪穴住居が検出されているほか、東南遺跡、太子町鵤遺跡、太子町斑鳩寺遺跡、たつの市門前遺跡などが挙げられる。

中期中葉からは遺跡数がさらに増加し、姫路市（仮称）高田区整遺跡（41～43）、姫路市和久遺跡（45）、川島遺跡（27）、太子町山田遺跡、太子町亀田遺跡、鵤遺跡、立岡遺跡、城山遺跡で竪穴住居を検出しているほか、高地性集落として眺望のよい場所を占拠する太子町壇特山山頂遺跡（25）がある。また、川島遺跡では方形周溝墓と円形周溝墓が見つかっており、川島川床遺跡からは絵画土器が出土している。

後期では中期から継続する川島遺跡、亀田遺跡、立岡遺跡、太子町南柳遺跡で竪穴住居が検出されているほか、片吹遺跡、門前遺跡、太子町茶屋ノ前遺跡、太子町蓮常寺北遺跡、太子町常全日蓮寺遺跡で遺構・遺物が見つかっている。

古墳時代

揖保川下流域と大津茂川流域の前方後円墳・前方後方墳の数は 30 基を超え、前期古墳が多いことから複数の首長が小地域に分かれて蟠踞していたことが想定される。揖保川下流域左岸の首長墓は大津茂川流域にその系譜をたどることができる。最古のものは丁・柳ヶ瀬遺跡の北に位置し、低地に立地する丁瓢塚古墳（２）であり、太子町壇特山 1 号墳（24）、壇特山 3 号墳（24）、太子町鷲山古墳（19）と続いていく。ただ、丁瓢塚古墳の規模が突出しており、被葬者は揖保川下流域全体を勢力基盤に置く首長であった可能性がある。首長墓ではないが、古墳時代初頭の太子町黒岡墳丘墓（15）や姫路市山戸 4 号墳（35）で調査が行われている。山戸 4 号墳は竪穴式石槨に土器棺が収められ、首長墓系列ではないものの太子町松田山古墳では斜縁二神二獣鏡・銅鏃・筒形銅器・鉄器・玉類が副葬されていた。

中期では確定的な首長墓がほとんどない状況だが、太子町黒岡山古墳（14）では箱式石棺に仿製だ龍鏡のほか、豊富な鉄製品が副葬されていた。

後期の古墳は平地に立地するものと丘陵斜面に軍を形成するものが認められる。前者には常全遺跡と太子町船塚古墳群がある。常全遺跡では墳丘が削平された横穴式石室が検出され、船塚古墳群では埴輪を伴う円墳と方墳を調査している。また、近接して竪穴住居も見つかっている。後者には姫路市の丁古墳群、太市中古墳群、西脇古墳群、太子町黒岡古墳群、上太田古墳群、山田古墳群、内山戸古墳群、白毛古墳群、立岡山古墳群、丹生山古墳群、東保山古墳群など横穴式石室を持つものである。黒岡古墳群中の黒岡神社古墳は大型の横穴式石室内に家形石棺が残存している。太市中古墳群中には九州系の要素を持つ古墳も含まれる。姫路市丁山頂古墳のように単独で立地し、T字形の平面形態と穹窿状石室を持つ。終末期になると内山戸古墳群のような小石室を持つもの、上太田古墳群のように切石造石室を持つものが出現する。

古墳時代初頭の集落としては弥生時代中期に出現してこの時期に規模を拡大する和久遺跡のほか、川島遺跡、鵤遺跡、太子町鵤石田遺跡（３）、城山遺跡、南柳遺跡、平方遺跡などが挙げられる。特に和久遺跡は大津茂川流域の拠点的な集落であり、丁・柳ヶ瀬古墳との関係も考えられる。古墳時代中期には南柳遺跡、川島遺跡で竪穴住居が検出されており、後期では亀田遺跡、鵤石田遺跡、船塚遺跡、南柳遺跡、太子町東保高田遺跡、城山遺跡で竪穴住居が検出されている。

古代～中世

奈良時代において、この地域は播磨国揖保郡に属していた。『播磨国風土記』では揖保郡には 18 里の記載があり、丁・柳ヶ瀬遺跡周辺は大家里に比定されており、平安時代の『和名類聚抄』では揖保郡 18 ～ 19 郷のうち大宅郷に比定される。

古代寺院では白鳳時代までさかのぼる姫路市下太田廃寺（29）がある。塔心礎・礎石群が残されており、法起寺式伽藍配置と考えられている。丁・柳ヶ瀬遺跡の北約５㎞の大津茂川上流には古代山陽道が東西に走っており、『延喜式』に記載された播磨９駅のうち太市駅と推定される姫路市向山遺跡があり、最近の調査で溝や瓦溜りが検出されている。集落遺跡では亀田遺跡で規格性の高い掘立柱建物が多数検出されているほか、壇特山遺跡(26)、川島遺跡、立岡遺跡で掘立柱建物が調査されている。丁・柳ヶ瀬遺跡でも刻印土器や墨書土器が出土している。

中世には姫路市勝原区・大津区・網干区・太子町糸井を含む一帯は福井庄に比定される。東南遺跡、立岡遺跡、太子町南佐田遺跡、たつの市福田片岡遺跡、たつの市宝林寺遺跡でこの時期の掘立柱建物群が調査されている。中世寺院では太子町円勝寺跡、太子町願成寺跡が知られ、円勝寺の近くには笹山経塚があり、経筒が斑鳩寺に伝えられている。ほかには、筑紫大道(中世山陽道)が福田片岡遺跡、平方遺跡で調査されている。

後藤博弥・田中眞吾「龍野市とその周辺の地質図の説明」『龍野市史』第４巻（1984）
後藤博弥・田中眞吾「太子町の地形・地質図とその説明」『太子町史』第３巻（1989）
高橋　学「丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境」『丁・柳ヶ瀬遺跡』兵庫県教育委員会（1995）
兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡』（1995）
兵庫県教育委員会『亀田遺跡（第1分冊）』（2000）
兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ』（2009）

第３章　遺構と遺物

第１節　遺構

１区の遺構

１区の基本層序を大別すると、上から現代の盛土（１）、近世以降の耕作層（２・３）、遺構が掘り込まれている土壌化層（４・９～12）、ベース層（６）ということになる。

この地区で検出された遺構には、柱穴群、土坑、溝がある。柱穴には平面形が隅丸方形を呈する大型のものと円形を呈するものが混在しており、時期的にも大きく二つに分けられる。ただ、調査区幅が狭小であったため、建物跡を抽出することができなかった。

柱穴群

Ｐ08（図版３：写真図版３）

調査区西部に位置する。径 33 ㎝、検出面からの深さ 35 ㎝を測る円形の柱穴である。断面観察で径 15 ㎝程度の柱痕が認められる。

Ｐ10ａ（図版３：写真図版３）

調査区西部に位置する。径 50 ㎝、検出面からの深さ 47 ㎝を測る円形の柱穴である。P10b に切られる。断面観察で径 25 ㎝程度の柱痕が認められる。底面に幅 10 ㎝、長さ 20 ㎝、厚さ 10 ㎝程度の亜角礫３個を根石として設置している。

Ｐ10ｂ（図版３）

調査区西部に位置する。一辺 70 ㎝、検出面からの深さ 36 ㎝を測る隅丸方形の柱穴である。P10a を切る。断面観察で径 40 ㎝程度の柱痕が認められる。

Ｐ12（図版３：写真図版３）

調査区西部に位置する。南北 60 ㎝、東西 70 ㎝、検出面からの深さ 25 ㎝を測る楕円形の柱穴である。P13 を切る。断面観察で径 30 ㎝程度の柱痕が認められる。

Ｐ13（図版３：写真図版３）

調査区西部に位置する。一辺 60 ㎝、検出面からの深さ 25 ㎝を測る方形の柱穴である。Ｐ12 に切られる。柱痕は不明である。

Ｐ14（図版３：写真図版３）

調査区西部に位置する。東西 63 ㎝、南北 56 ㎝、検出面からの深さ 9 ㎝を測る歪んだ楕円形の柱穴である。柱痕は 22 ㎝で中央に一辺約 15 ㎝、厚さ 13 ㎝の角礫を据え、根石としている。

Ｐ18（図版３：写真図版４）

調査区西部に位置する。径 45 ㎝、検出面からの深さ 30 ㎝を測る円形の柱穴である。断面観察では中央より南側に寄った位置に径 13 ㎝程度の柱痕が認められる。掘方の底には長さ 15 ㎝、幅 10 ㎝の亜角礫を据えている。

Ｐ20（図版３：写真図版３）

調査区西部に位置する。一辺 50 ㎝、検出面からの深さ 37 ㎝を測る方形の柱穴である。中央よりやや北東に寄った位置に柱痕があり、断面観察では径は 13 ㎝程度である。

Ｐ21（図版３：写真図版４）

調査区西部に位置する。一辺 50 ㎝、検出面からの深さ 25 ㎝を測る方形の柱穴である。中央よりやや北西に寄った位置に柱痕があり、断面観察では径は 20 ㎝程度である。

Ｐ24（図版４：写真図版４）

調査区西部に位置する。東西 80 ㎝、南北 70 ㎝、検出面からの深さ 40 ㎝を測る方形の柱穴である。ほぼ中央に柱痕があり、掘方の底にはおおよそ 20 ㎝角の亜角礫を据え、その周りに長細い亜円礫を置いて根石としている。須恵器杯Ｂ蓋（１）が出土している。

Ｐ25（図版４）

調査区西部、南壁に接した状態で検出した。Ｐ26 と一部が平面的に重複する。径 50 ㎝以上、検出面からの深さ 37 ㎝を測る円形の柱穴である。柱痕の直径は不明だが、底面に扁平な亜円礫を据え根石としている。

Ｐ26（図版４：写真図版４）

調査区西部、南壁に接した状態で検出した。Ｐ25 と一部が平面的に重複する。東西 40 ㎝、南北 50 ㎝以上、検出面からの深さ 44 ㎝を測る方形の柱穴である。柱痕は南西隅に寄っており、直径は約 20 ㎝である。

Ｐ32（図版４：写真図版５）

調査区西部北端付近に位置する。SK33 と一部が平面的に重複する。南北 70 ㎝、東西 45 ㎝、検出面からの深さ 16 ㎝を測る楕円形の柱穴である。柱痕は不明である。土師器甕（２）が出土している。

Ｐ34（図版４：写真図版５）

調査区西部北端付近に位置する。SK33 と一部が平面的に重複する。東西 60 ㎝、南北 50 ㎝、検出面からの深さ 16 ㎝を測る方形の柱穴である。断面観察で柱痕の直径は 24 ㎝である。

Ｐ39（図版４：写真図版５）

調査区西部に位置する。東西 50 ㎝、南北 60 ㎝、検出面からの深さ 30 ㎝を測る歪んだ方形の柱穴である。柱痕の直径は約 15 ㎝である。

Ｐ95（図版６：写真図版７）

調査区西部に位置する。径 50 ㎝以上、検出面からの深さ 35 ㎝を測る円形の柱穴である。Ｐ10ｂと一部が平面的に重なっていた可能性がある。側溝に重なっていたため、柱痕の規模は不明であるが、底面に長さ 28 ㎝、幅 15 ㎝、厚さ 13 ㎝の角礫が据えられていた。

Ｐ42（図版４：写真図版５）

調査区中央部に位置する。東西 50 ㎝、南北 40 ㎝、検出面からの深さ 34 ㎝を測る歪んだ方形の柱穴である。柱痕の直径は約 28 ㎝である。

Ｐ44（図版４：写真図版５）

調査区中央部に位置する。東西 50 ㎝、南北 55 ㎝、検出面からの深さ 29 センチを測る方形の柱穴である。柱痕の直径は約 25 ㎝、検出面で柱痕内に亜角礫が含まれ、底面には幅 13 ㎝、長さ 26 ㎝、厚さ 12 ㎝の亜角礫が据えられていた。

Ｐ45（図版４：写真図版６）

調査区中央部に位置する。東西 50 ㎝、南北 60 ㎝、検出面からの深さ 14 ㎝を測る歪んだ楕円形の柱穴である。断面観察で柱痕の直径は 19 ㎝である。

Ｐ49（図版４）

調査区中央部に位置する。南北 48 ㎝、東西 35 ㎝以上、検出面からの深さ 3 ㎝を測る歪んだ方形の柱穴である。ほとんど底面近くまで削平されているので柱痕の位置・規模は不明だが、北側に寄せて長さ 28 ㎝、幅 14 ㎝、厚さ 15 ㎝の亜角礫が据えられている。

Ｐ57（図版５：写真図版６）

調査区中央部北端に位置する。南北 38 ㎝、東西 35 ㎝、検出面からの深さ 20 ㎝を測る円形の柱穴である。Ｐ58 と平面的に一部が重なる。柱痕は直径 17 ㎝で、最上部から土師器杯Ａ（26）が出土している。

Ｐ58（図版５：写真図版６）

調査区中央部北端に位置する。径 27 ㎝、検出面からの深さ 33 ㎝を測る円形の柱穴である。Ｐ57 と平面的に一部が重なる。柱痕の直径は最大 15 ㎝で断面観察では下方に向かって細くなっていく。

Ｐ59（図版５：写真図版６）

調査区中央部北端に位置する。東西 67 ㎝、南北 50 ㎝以上、検出面からの深さ 26 ㎝を測る方形の柱穴である。柱痕は西側に偏り、直径 23 ㎝で、底面には縦・横 18 ㎝、厚さ 10 ㎝の亜角礫を据え、その周囲には拳大以下の亜円礫を置く。

Ｐ60ａ（図版５：写真図版６）

調査区中央部に位置する。東西65㎝、南北55㎝以上、検出面からの深さ27㎝を測る方形の柱穴である。Ｐ60ｂと一部が平面的に重なる。柱痕は不明である。

Ｐ60ｂ（図版５：写真図版６）

調査区中央部に位置する。東西60㎝、南北70㎝、検出面からの深さ30㎝を測る歪んだ方形の柱穴である。柱痕はほぼ中央に位置し、直径約25㎝である。

Ｐ63（図版５：写真図版６）

調査区中央部に位置する。径 33 ～ 37 ㎝、検出面からの深さ 25 ㎝を測る歪んだ円形の柱穴である。SD35 と平面的に重なる。柱痕は径18㎝で掘方よりも底面が深くなっている。

Ｐ64（図版５：写真図版７）

調査区中央部に位置する。一辺60㎝、検出面からの深さ40㎝を測る方形の柱穴である。SD35 と平面的に重なり、Ｐ105 と一部が重なる。柱痕は径約12㎝である。

Ｐ115

調査区中央部に位置する。SD35 と平面的に重なり、Ｐ64 とは大きく重なり、全体の形状は不明である。幅60㎝、検出面からの深さ44㎝を測る。柱痕は径約20㎝である。

Ｐ66

調査区中央部に位置する。Ｐ67 と一部が平面的に重なる。一辺40㎝、検出面からの深さ14㎝を測る方形の柱穴である。柱痕は不明である。

Ｐ67（図版５：写真図版７）

調査区中央部に位置する。Ｐ66 と一部が平面的に重なる。南北43㎝、東西35㎝、検出面からの深さ30㎝を測る楕円形の柱穴である。柱痕は北側に偏り、径は約26㎝である。

Ｐ69（図版５：写真図版７）

調査区東部に位置する。一辺50 ～ 55㎝、検出面からの深さ37㎝を測る隅丸方形の柱穴である。柱痕は西側に偏り、径は約18㎝である。

Ｐ71（図版５：写真図版７）

調査区中央部に位置する。SD35 と平面的に重なり、Ｐ72 に接する。径40㎝、検出面からの深さ13㎝を測る円形の柱穴である。柱痕は不明である。

Ｐ103(図版６：写真図版８)

調査区中央部に位置する。東西 45 ㎝、南北 60 ㎝、検出面からの深さ 45 ㎝を測る方形の柱穴である。Ｐ64・Ｐ73・Ｐ104 と一部が平面的に重なる。柱痕は径 19 ㎝を測る。須恵器杯Ｂ(８)が出土している。

Ｐ105(図版６：写真図版８)

調査区中央部に位置する。径 35 ㎝、検出面からの深さ 24 ㎝を測る円形の柱穴である。柱痕は径約 13 ㎝である。

Ｐ76(図版５：写真図版７)

調査区東部に位置する。径 35 ～ 37 ㎝、検出面からの深さ 18 ㎝を測る楕円形の柱穴である。柱痕はほぼ中央で径約 17 ㎝である。

Ｐ79(図版５：写真図版７)

調査区東部に位置する。一辺 50 ㎝、検出面からの深さ 35 ㎝を測る方形の柱穴である。柱痕は南に偏り、径約 18 ㎝を測る。

Ｐ85(図版６：写真図版７)

調査区東部北端に位置する。東西 50 ㎝、南北 30 ㎝以上、検出面からの深さ 25 ㎝を測る方形の柱穴である。Ｐ84 と一部が平面的に重なる。柱痕は南に偏っており、径約 25 ㎝である。土師器杯Ａ(５)が出土している。

Ｐ99(図版６：写真図版８)

調査区東部に位置する。径 50 ㎝、検出面からの深さ 30 ㎝を測る円形の柱穴である。柱痕は径約 20 ㎝を測り、柱穴のほぼ中央に位置する。

Ｐ100(図版６：写真図版８)

調査区東部に位置する。東西 55 ㎝、南北 45 ㎝、検出面からの深さ 34 ㎝を測る隅丸方形の柱穴である。Ｐ101ａ・Ｐ101ｂと一部が平面的に重なる。柱痕は西に偏り、直径約 20 ㎝である。

Ｐ101ａ(図版６：写真図版８)

調査区東部に位置する。東西 40 ㎝、南北 50 ㎝以上、検出面からの深さ 17 ㎝を測る長楕円形の柱穴である。Ｐ100・Ｐ101ｂ・Ｐ101ｃと一部が平面的に重なる。柱痕は径約 15 ㎝である。須恵器杯Ａ(６)・杯Ｂ(７)が出土している。

Ｐ101ｃ(図版６：写真図版８)

調査区東部に位置する。東西 50 ㎝、南北 30 ㎝、検出面からの深さ 22 ㎝を測る長楕円形の柱穴である。Ｐ101ａと一部が平面的に重なる。柱痕は径約 12 ㎝である。土師器皿(47)が出土している。

Ｐ107（図版６：写真図版８）

調査区東部に位置する。東西 50 ㎝、南北 40 ㎝、検出面からの深さ 30 ㎝を測る楕円形の柱穴である。SD35 と平面的に重なる。柱痕は径約 28 ㎝である。

Ｐ112（図版６：写真図版９）

調査区東部に位置する。東西 60 ㎝、南北 65 ㎝、検出面からの深さ 22 ㎝を測る歪んだ方形の柱穴である。SD35 と平面的に重なり、SK102 と一部が重なる。柱痕は径約 15 ㎝である。

Ｐ110（図版６：写真図版９）

調査区東部に位置する。東西 60 ㎝、南北 65 ㎝、検出面からの深さ 42 ㎝を測る歪んだ方形の柱穴である。SK102 と平面的に重なり、Ｐ111 と一部が重なる。柱痕は南に偏り、径は約 25 ㎝である。須恵器杯Ａ（10）、杯Ｂ（11）が出土している。

Ｐ111（図版６：写真図版９）

調査区東部に位置する。東西 40 ㎝、南北 45 ㎝以上、検出面からの深さ 52 ㎝を測る楕円形の柱穴である。SK102 と平面的に重なり、Ｐ110 と一部が重なる。柱痕は北に偏り、径は約 22 ㎝である。須恵器杯Ｂ蓋（12）が出土している。

土坑

SK33（図版７：写真図版９）

調査区西部北端付近に位置する。Ｐ32・Ｐ34 と一部が平面的に重複する。東西 2.1ｍ、南北 50 ㎝、検出面からの深さ 18 ㎝を測る長方形の土坑である、

SK61（図版７：写真図版９）

調査区中央部北端に位置する。東西 48 ㎝、南北 72 ㎝、検出面からの深さ 14 ㎝を測る長方形の土坑である。SD35 と一部が平面的に重なる。検出時に上面の一部に炭層の分布が認められた。

SK102（図版７：写真図版９）

調査区東部に位置する。東西 1.3ｍ、南北 1ｍ、検出面からの深さ 17 ㎝を測る楕円形の土坑である。断面刑は浅い皿状を呈し、Ｐ110・Ｐ111 と平面的に重なり、SD35 と一部が重なる。土師器甕（17）のほか、円筒埴輪片（51）が出土している。

溝状遺構

SD02（図版７）

調査区西部に位置し、南北に走る溝である。検出長 3.3ｍ、最大幅 60 ㎝、検出面からの深さ 4 ㎝を測る。遺物は出土していないため、時期は不明である。

SD35（図版７：写真図版９）

調査区中央部から東部にかけて斜めに走る溝である。南東に向かうにしたがって輪郭が不明瞭になる。検出面からの深さ 20 ㎝、幅は明確な部分で 2mを測る。奈良時代の土師器（18・19）のほか、弥生土器（20・21）、円筒埴輪（22）が出土している。

２区の遺構

２区は上下２面の調査を実施した。なお、下層の調査は、安全確保の観点から調査面積を若干狭めて実施した。また、本来上層に伴うと考えられるピット状の変色部分が下層調査時に認められ、遺構平面図としては上層に含めて作図している。いずれも浅く柱穴である可能性は低いものと考えられる。

溝状遺構

SD01（図版７：写真図版 12）

調査区北東隅を斜めに横切る。幅約 75 ㎝、検出長 5m、検出面からの深さ 45 ㎝を測る溝である。弥生土器（29 ～ 31・52 ～ 56）が出土している。遺物は弥生時代前期と後期のものが混在しており、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

土坑

SK16（図版７：写真図版 12）

南北 50 ㎝、東西 30 ㎝、検出面からの深さ 6 ㎝を測る楕円形の土坑である。上層に伴うものと考えられる。

SK18（図版７：写真図版 12）

確認トレンチおよび上層 SD01 の一部が平面的に重複するため、形状と規模は明確ではない。残存部の幅 40 ㎝、検出面からの深さ 28 ㎝を測る。縄文土器の細片を埋土中に含み、縄文時代までさかのぼる土坑である可能性がある。

SK19（図版７：写真図版 12）

調査区中央東端に位置する。直径 45 ㎝、検出面からの深さ 5 ㎝を測る。

第２節　遺物

１区の遺物

柱穴、土坑、溝などから遺物が出土している。結論を先に述べると、大きく奈良時代の遺物と鎌倉時代の遺物に分かれ、遺構のベース面からは弥生時代の遺物が出土しているほか、古墳時代の遺物も流れ込んでいる。

柱穴出土遺物

１は須恵器杯Ｂ蓋の口縁部片である。口縁部は外側に面を持ち、端部を下方に拡張する。天井部に自然釉が認められる。Ｐ24 から出土した。

２は土師器甕の口頸部片である。口縁部は横ナデ、体部は縦方向のハケが認められる。P 32 から出土した。

３は製塩土器と思われる土師器の口縁部片である。磨滅のため調整は不明だが、外面に被熱痕跡が認められる。4 は須恵器高坏の脚部である裾端部は外側に面を持ち、全体に自然釉がかかる。いずれも P 82 から出土した。

５は土師器杯 A である。口縁端部内面に 1 条の沈線を施す。P 85 から出土した。

６は須恵器杯 A である。底部はヘラ切りである。7 は須恵器杯 B 身である。底部ヘラ切りの後、高台を貼り付ける。口縁部に重ね焼きに伴う変色部分がある。いずれも P 101 a から出土した。

８は須恵器杯 B 身である。底部ヘラ切りの後、高台を貼り付ける。9 は杯 B 蓋の天井部片である。扁平なつまみを持つ。いずれも P 103 から出土した。

10 は須恵器杯 A である。軽く内湾して立ち上がり、若干深い体部を持つ。11 は須恵器杯 B である。底部は回転ヘラ切りの後、外側に踏ん張る太い高台が付く。いずれも P 110 から出土した。

12 は須恵器杯 B 蓋である。天井部は平坦で口縁部は外側に面を持ち、端部を下方に拡張する。13 は須恵器陶硯の脚部小片である。脚端部を帯状に肥厚させている。いずれも P 111 から出土した。

14 は土師器小皿である。口縁端部は外側に面を持ち、底部は指押えの後ナデで仕上げる。P 74 から出土した。平安時代後期のものである。

15 も土師器小皿である。底部を欠くが、14 とほぼ同じ形態のものと考えられる。P 91 から出土した。

16 は白磁碗の底部である。内面見込み部に沈線を施す。底部は削り出しの輪高台で露胎である。P 87 から出土した。

26 は土師器杯 A である。体部調整は不明だが、底部はヘラ切り、P 57 から出土した。

土坑出土遺物

17 は土師器甕である。口縁部が大きく外反し、球形の胴部を持つ。体部調整は外面がハケ、内面がナデである。SK102 から出土した。

溝出土遺物

18 は土師器甕である。口縁端部をつまみ上げる。頸部の屈曲は弱く、おそらく長胴の体部を持つ。体部調整は外面がハケ、内面はナデで指押さえの痕跡が残る。19 は土師器高坏の脚部である。縦方向の削りにより面取りを行う。いずれも SD35 から出土した。

20・21 は弥生土器の壺である。20 は外反する口縁を持ち、端部を下方に拡張する。21 は直立する短い口頸部を持ち、端部をわずかに拡張する。SD35 のベース面から出土した。22 は円筒埴輪片である。タガを回し、円形の透かしが残っている。体部外面に横方向のハケを施す。いずれも SD35 から出土したが、流れ込みと考えられる。

包含層出土遺物

23 は弥生土器の甕である。口唇部に刻み目を施す。前期のものである。24 は土師器高坏である。坏部で底部から稜を作って外反する口縁部を持つ。25 は土師器甕の口縁部片である。端部は外傾して面を持ち、体部はハケを施している。27・28 は須恵器杯 B 身である。27 は底部を回転ヘラ切りし、体部と底部の境に高台を貼り付ける。28 も同様の形態である。（鐵）

２区の遺物

２区上層では SD01 と下層包含層から遺物が出土している。

溝出土土器

29 ～ 31 は SD01 から出土した。29 は弥生土器の甕である。口縁部は外反し、端部は外側に面を持つ。平底で体部外面には連続ラセンタタキを施し、内面はハケ調整を行う。30 は弥生土器甕の蓋と考えられる。天井部に指押さえが残り、全体にはナデ調整を行っている。31 は弥生土器の壺である。口縁部は外反し端部は外側に面を持つ。体部はつぶれた球胴であり、タタキ調整をナデ調整で消している。いずれも弥生時代後期後半のものと考えられる。

下層出土土器

２区下層では調査区北端中心に縄文土器が出土している。

32 はキャリパー型の器形を持つ深鉢である。口縁部に隆帯と沈線を組み合わせた区画文と渦文を組み合わせた文様帯を連続して施す。区画文の中央から隆帯が垂下し、その両側に沈線を施す。渦文部分からも隆帯と沈線が垂下し、沈線は途中で反転して幅の狭い渦文を形成し、その部分で次の文様帯から垂下した隆帯と横位の短い隆帯で接続する。隆帯上には RL の縄文を施す。加曾利 E 式の影響を強く受けるとともに体部を垂下する隆帯については咲畑式の影響も受けている可能性がある。北白川 C 式古相にあたる。

33 は深鉢の突起状山形口縁部片である。縦位の連続沈線を施す。いわゆる北白川 C 式 C 類に含まれ、中期末古相に位置づけられる。

34 は波状口縁の波底部に当たる破片である。口縁直下に隆帯を貼り付けて、沈線により口縁部と胴部を区画する。中期末古相に位置づけられる。

35 は粗製の深鉢である。器形はキャリパー形を呈し、表裏に二枚貝条痕が認められる。中期末に属すると考えられる。

36 は深鉢で波状口縁の波頂部片である。口縁部はわずかに内傾する。弧状の沈線を連続施文し、一部に楕円区画を配する。中期末のものと考えられる。

37・38 は同一個体と考えられる深鉢の口縁部である。屈曲して一部を垂下させる。地紋として RL の縄文を施した後、沈線により区画を行い、一部の区画では縄文を磨り消している。北白川 C 式の範疇でとらえているが、縁帯文系土器の可能性もあり、後期前葉まで下るかもしれない。

39 は深鉢の胴部である。内面には二枚貝条痕が認められる。横位の弧文を描く沈線を組み合わせて区画文様としており、里木式系のものと考えられる。中期末古相に位置づけられる。

40 は平縁の粗製深鉢である。表裏に巻貝条痕が認められる。後期初頭のものと考えられる。

41は粗製深鉢の底部である。器壁は薄く、全体に摩滅している。体部外面には二枚貝の条痕が認められる。中期末から後期初頭のものと考えられる。

42は深鉢の底部である。残存状況が悪いものの、外面には底面直上まで文様が施されていたと考えられる。中期末新相から後期初頭のものと考えられる。

43 は深鉢の底部片である。底面はわずかに窪む。側面に二枚貝条痕が認められる。中期末のものと考えられる。

44 は底面がドーム上に窪む底部片である。体部の立ち上がりが低く浅鉢であると考えられる。後期に属すると考えられる。

石器・石製品

石器・石製品については出土点数も少ないため、一括して報告する。

Ｓ１はSD35の地山直上面より出土したクサビ形石器である。横長剥片を素材とし、図上部の縁辺に、打撃の繰り返しによる顕著な潰れが認められる。また、縁辺に見られる一部の剥離痕（図に網かけで表示）は、他の剥離面と比較して、明らかに風化が浅く、いわゆる「二重パテナ」の状態を示す。なお、本資料の素材は、肉眼観察では讃岐産のサヌカイトと判断される。長さ65.9㎜、幅44.1㎜、厚さ4.8㎜、重量15.9ｇ。

Ｓ２は包含層中より出土した、方形を呈するクサビ形石器である。素材剥片の形態は不明であるが、図上下両側縁は、打撃によって顕著に潰れており、左図右側面には、截断面が形成されている。サヌカイトを素材とする。長さ31.5㎜、幅33.2㎜、厚さ6.8㎜、重量8.2グラム。

１・２区からは使用痕は明瞭ではないものの、遺跡内に人為的に持ち込まれと考えられる円礫が数点出土しており、うち３点を図示した。

Ｓ３は断面が隅丸三角形を呈する。２区包含層から出土した。長さ13㎝、幅7.9㎝、厚さ6.2㎝。

Ｓ４は断面がややつぶれた円形を呈する。２区包含層から出土した。長さ10.7㎝、幅8.5㎝、厚さ7.6㎝。

Ｓ５は断面がややつぶれた円形を呈する。１区Ｐ69から出土した。長さ12.7㎝、幅7.8㎝、厚さ6.9㎝。

（久保）

第３節　小結

今回の調査で検出された遺構は弥生時代の溝、奈良時代の柱穴・土坑、鎌倉時代の柱穴である。

弥生時代の溝は２区北東部を斜めに流下するもので、旧地形の変換点に位置していると考えられ、性格としては区画溝の可能性を持つ。

奈良時代の柱穴は、調査範囲が狭小であるため、建物を抽出することはできなかったが、大型で方形に近い平面形を持ち、底部に根石を設置するなどしっかりとした掘立柱建物を構成していた柱穴である可能性が高い。

平安時代後期の柱穴については、奈良時代のものより小型で円形を呈するものである。ただ、これらについても建物を抽出することができなかったが、手づくねで京都系と考えられる土師小皿や白磁碗が出土していることから、一般農民層の住居ではない可能性が高い。

遺物の面では、包含層からの出土であるが縄文時代中期末を中心とした土器群が出土している。主として中期末のもので、北白川Ｃ式の良好な資料が含まれている。

（鐵）

第１表　出土土器一覧表（１）

報告番号	図版	写真図版	実測番号	種　別	器　種	地区	遺 構 名	法量（cm）				残存状況	色　調	焼成	胎　　土	調　　整	備　考
								口径	器高	最大径	底径						
1	8	13	8	須恵器	杯Ｂ蓋	1	P24	19.3	1.2			口縁部１/10	灰白	良	径 0.5 ～ 1 mm の砂粒を含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面に自然釉
2	8	13	1	土師器	甕	1	P32	34.0	5.9			口縁部１/８以下	にぶい黄橙～灰黄褐色	良	径１～ 2.5mm 程度の石英、長石、チャートなど含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ残る 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	
3	8	13	2	土師器	製塩土器	1	P82		6.0			口縁部若干	にぶい黄橙～灰黄褐色	良	径１～２mm 程度の石英、長石、チャートなど含む	摩滅のため、調整不明	
4	8	13	7	須恵器	脚部（高坏）	1	P82		3.35		10.0	脚裾部１/８以下	灰～オリーブ黒	良	微細な石英含む。精良	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
5	8	13	6	土師器	杯Ａ	1	P85 掘方、柱痕	15.8	2.7			口縁部１/８以下	橙	良	微細な赤色粒、石英含む。精良	外面：口縁部～体部ヨコナデ 内面：口縁部～体部ヨコナデ	
6	8	13	14	須恵器	杯Ａ	1	P101a	12.3	3.65		9.0	口縁部～底部１/８以下	灰白	良	微細な長石など含む。精良	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	
7	8	13	18	須恵器	杯Ｂ身	1	P101a	13.2	4.4		9.4	口縁部若干、高台１/４弱、底部１/９	灰	良	径 0.5 ～ 2 mm の砂粒を含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後高台貼り付けナデ 内面：回転ナデ	重ね焼き痕跡
8	8	13	19	須恵器	杯Ｂ身	1	P103		2.0		9.0	高台・底部１/５	灰オリーブ	良	径 0.5 ～ 1.5mm の砂粒を含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後高台貼り付けナデ 内面：回転ナデ	
9	8	13	15	須恵器	杯Ｂ蓋	1	P103		1.3			つまみ部分完存	灰白	良	微細な長石など含む。精良	外面：天井部ヘラケズリ、つまみ貼り付けナデ 内面：天井部回転ナデの後仕上げナデ	
10	8	13	16	須恵器	杯Ａ	1	P110　柱痕	12.6	4.0			口縁部～体部１/８以下	灰白	良	微細な長石など含む。精良	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
11	8	13	20	須恵器	杯Ｂ身	1	P110		3.0		7.6	高台、底部１/８	灰白	良	径 0.5 ～ 1 mm の砂粒を少量含む	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け 内面：回転ナデ	
12	8	13	21	須恵器	杯Ｂ蓋	1	P111　柱痕	12.8	1.3			口縁部１/４、天井部１/５	灰白	良	径 0.5 ～ 1 mm の砂粒を少量含む	外面：天井部回転ヘラ切りの後ナデ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	
13	8	13	17	須恵器	陶硯	1	P111　断割		1.95			脚部小片	灰白	良	微細な長石など含む。精良	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
14	8	14	3	土師器	小皿	1	P74	9	1.4			口縁部２/５、底部７/８	灰白	良	径 0.5mm 程度の石英など含む	外面：口縁部～体部ヨコナデ、底部指オサエの後ナデ 内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	手づくね
15	8	13	5	土師器	小皿	1	P91	8.3	1.3			口縁部１/５	にぶい橙	良	微細な赤色粒、石英含む。精良	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部～体部ヨコナデ	
16	8	14	9	白磁	碗	1	P87		3.2		6.2	体部若干、底部ほぼ完存	灰白	良	微細な黒色粒含む。精緻	外面：底部ケズリ出し、底部付近露胎 内面：全面施釉、見込み部に圏線	
17	8	13	38	土師器	甕	1	SK102　東半	16.6	16	17.4		口縁～体部１/５	浅黄橙	良	微細～１mm の長石、石英、赤色粒など含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部不整方向のハケ 内面：口縁端部ヨコナデ、口縁部板ナデ、体部ナデ	
18	8	13	29	土師器	甕	1	SD35	18.9	7.9			口縁部～体上部１/８以下	灰白～淡黄	良	径１mm 以下の石英、長石など多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部斜め方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデ、板ナデ、体部ナデ、指頭圧痕	
19	8	13	31	土師器	高坏	1	SD35		9.7			脚柱部のみ１/４	にぶい橙～橙	良	微細な長石など含む。精良	外面：脚柱部ヘラケズリ（面取り）、脚裾部ヨコナデ、一部ハケ 内面：脚柱部上半は縦の後横方向のナデ、下半はナデ、脚裾部ヨコナデ	
20	8	13	30	弥生土器	壺	1	SD35　下層	16.0	7.1			口縁部１/４	灰白～淡黄	良	径 0.5 ～ 2 mm の長石など含む	外面：口縁部ヨコナデ、頸部～体部摩滅のため調整不明 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	
21	8	13	28	弥生土器	壺	1	SD35　下層	14.1	5.3			口縁～頸部１/８	灰白～にぶい黄橙	良	微細な石英、長石など多く含む	外面：口縁部～頸部ヨコナデ 内面：摩滅のため調整不明	
22	8	15	34	埴輪	円筒埴輪	1	SD35　東半		8.0	20.0		タガ周辺小片	橙	良	微細～１mm の長石、石英、赤色粒など含む	外面：横方向のハケ、タガ貼り付けナデ、円形透かし 内面：ナデ	
23	9	13	42	弥生土器	甕	1	包含層	20.7	5.2			口縁部１/８以下	灰白～にぶい黄褐	良	径１～２mm の石英、長石など多く含む	口唇部に刻み目。摩滅のため調整不明	
24	9	13	40	土師器	高坏	1	包含層	13.6	3.5			口縁部１/４	灰白～淡黄	普通	径１mm 程度の石英、赤色粒など含む	外面：口縁部ヨコナデ、坏下半は磨滅 内面口縁部ヨコナデ、坏内部は不整方向のハケ、ミガキ	
25	9	13	41	土師器	甕	1	包含層		6.4			口縁部 1/8 以下	灰白～灰黄褐	良	径１～２mm の石英、長石、チャートなど含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部摩滅	
26	9	14	4	土師器	杯Ａ	1	P57　柱痕	12.1	4.1		8.3	口縁部１/４強、底部完存	浅黄橙	良	径 0.5mm 以下と３mm 前後の石英、長石など含む	外面：口縁部～体部摩滅のため調整不明、底部ヘラ切り 内面：ヨコナデ	
27	9	13	44	須恵器	杯Ｂ	1	包含層	17.9	5.8		12.9	口縁部～高台部１/８	灰白～灰	良	１～２mm 程度の長石、わずかに含む。精良	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け 内面：回転ナデ	
28	9	13	43	須恵器	杯Ｂ	1	包含層		3.35		7.4	底部１/２	灰白	良	微細な長石など含む。精良	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け 内面：回転ナデ	若干新しい？
29	9	16	49	弥生土器	甕	2	SD01	14.8	29.8	21.8	5.2	口縁部～体部上半３/２、底部１/８	橙～浅黄橙	良	微細な石英、長石など含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部連続螺旋タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部上半指ナデの後ハケ	後期後半

報告番号	図版	写真図版	実測番号	種別	器種	地区	遺構名	法量(cm) 口径	器高	最大径	底径	残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考
30	9	15	59	弥生土器	蓋	2	SD01		5.5			つまみ片	褐灰～灰黄	良	微細～径 2.5mm 程度の石英、長石、赤色粒など含む	外面：指オサエの後ナデ 内面：ナデ	
31	9	15	50	弥生土器	壺	2	SD01	11.3	9.4	18.8		口縁部 1/4、体部上半 1/3	浅黄橙～灰	良	微細な石英、長石など含む	外面：全体に摩滅。口縁部はおそらくヨコナデ、体部はタタキの後丁寧なナデ 内面：全体に摩滅。口縁部はおそらくヨコナデ、体部は最後にナデ	後期後半
32	9	16	60	縄文土器	深鉢	2	土器 3	26.8	17.85			口縁部 1/6		良			北白川 C 式古相
33	9	-	65	縄文土器	深鉢	2	下層(北半)		5.25			口縁部片	橙～浅黄橙	良	径 0.5 ～ 3 mm 程度の長石、石英などを多く含む	外面：沈線。地紋は摩滅により不明 内面：ナデ	北白川 C 式古相
34	9	17	64	縄文土器	深鉢	2	下層(北半)		7.55			口縁部片	にぶい黄橙	良	径 0.5 ～ 1 mm 程度の長石、石英などを多く含む	外面：隆帯貼り付け、沈線による区画 内面：ナデ	
35	9	17	72	縄文土器	深鉢	2	北端部 土器周辺		7.8			口縁部片	にぶい赤褐	良	径 1 ～ 2.5mm 程度の長石、石英などを多く含む	外面：横方向の二枚貝条痕 内面：横方向の二枚貝条痕	波状口縁、 中期末
36	9	17	70	縄文土器	深鉢	2	下層					口縁部 1/8	黄灰～ にぶい褐	良	径 0.5 ～ 3 mm 程度の長石、石英などを多く含む	外面：二枚貝条痕、多重沈線。 内面：二枚貝条痕	大波状口縁、 中期末
37	10	17	67	縄文土器	深鉢	2	黄褐色 粘質シルト					口縁部片	灰黄褐	良	径 0.5 ～ 2 mm 程度の長石、石英などを多く含む	外面：RL 縄文の上に沈線 内面：ナデ	68 と同一個体、 縁帯文系？
38	10	17	68	縄文土器	深鉢	2	黄褐色 粘質シルト					口縁部片	灰黄褐	良	径 0.5 ～ 3 mm 程度の長石、石英などを多く含む	外面：RL 縄文の上に沈線 内面：ナデ	67 と同一個体、 縁帯文系？
39	10	17	63	縄文土器	深鉢	2	下層(北半)		5.4			体部片	にぶい黄橙	良	径 0.5 ～ 1 mm 程度の長石、石英などを含む	外面：沈線による区画、区画内磨り消し 内面：横方向の二枚貝条痕	
40	10	17	71	縄文土器	深鉢	2	下層精査		6.5			口縁部片	灰黄褐	良	径 0.5 ～ 1 mm 程度の長石、石英などを多く含む	外面：横方向の巻貝条痕 内面：横方向の巻貝条痕	
41	10	17	62	縄文土器	深鉢	2	土器 2		11.2		10.6	底部ほぼ完存	灰白～ にぶい黄橙	良	径 1 mm 程度の長石、石英、チャートなど多く含む	外面：体部は右下がりの二枚貝条痕、底部は摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	
42	10	-	61	縄文土器	深鉢？	2	土器 2		3.7		10.7	底部 2/3	褐灰～ にぶい黄橙	良	径 2 mm 程度の長石、石英など多く含む	外面：体部は摩滅のため調整不明、底部はナデ 内面：ナデ	
43	10	17	66	縄文土器	深鉢	2	下層(北半)		2.6		13.2	底部片	灰白～ にぶい黄橙	良	径 0.5 ～ 1 mm 程度の長石、石英などを多く含む	外面：体部二枚貝条痕、底部ナデ 内面：摩滅のため調整不明	
44	10	-	69	縄文土器	浅鉢	2	下層		2.2		6.05	底部片	にぶい黄橙	良	径 0.5 ～ 3 mm 程度の長石、石英などを多く含む	摩滅のため、調整不明	後期
45	写真のみ	13	12	須恵器	椀	1	P86					底部小片	灰	良	微細な石英など含む	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、見込み部に段	森田Ⅰ－1
46	写真のみ	13	11	須恵器	椀	1	P86					口縁部小片	灰	良	微細な石英など含む	内外面とも回転ナデ。口縁部に重ね焼き痕跡	
47	写真のみ	13	26	土師器	皿 A	1	101c　断割					口縁部小片	にぶい橙	良	微細な長石など含む。精良	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
48	写真のみ	13	27	土師器	杯 B 蓋	1	P105					口縁部小片	にぶい橙	良	微細な長石など含む。精良	摩滅のため不明	生焼けの 須恵器？
49	写真のみ	15	33	埴輪	円筒埴輪	1	包含層 SD35 東端付近		5.2			タガ周辺小片	橙	良	微細～ 1 mm の長石、石英、赤色粒など含む	外面：横方向のハケ、タガ貼り付けナデ、円形透かし 内面：ナデ	
50	写真のみ	15	37	埴輪	壺形埴輪	1	SD35　下層					頸部小片	浅黄橙～橙	良	微細～ 1 mm の長石、石英、赤色粒など含む	外面：頸部に突帯貼り付けナデ 内面：ナデ	
51	写真のみ	15	39	埴輪	円筒埴輪	1	SK102		4.7			底部小片	浅黄橙～橙	良	微細～ 1 mm の長石、石英、赤色粒など含む	外面：横方向のハケ、ナデ 内面：ナデ	
52	写真のみ	16	53	弥生土器	甕	2	SD01					口縁部小片	灰白	良	径 1.5mm 程度の長石、石英、赤色粒など含む	外面：頸部直下にヘラ描き沈線 2 条、全体に摩滅 内面：全体に摩滅	前期
53	写真のみ	16	55	弥生土器	壺？	2	SD01					体部小片	明赤褐(スリップ) ～にぶい黄橙	良	径 1.5mm 程度の長石、石英、赤色粒など含む	外面：ヘラミガキ、ヘラ描き沈線 5 条以上と 2 条の文様帯 内面：全体に摩滅	前期
54	写真のみ	16	54	弥生土器	壺？	2	SD01					体部小片	にぶい黄橙	良	径 1.5mm 程度の長石、石英、赤色粒など含む	外面：ヘラミガキ、ヘラ描き沈線 7 条 内面：全体に摩滅	前期
55	写真のみ	16	52	弥生土器	壺	2	SD01					頸部小片	灰白	良	径 1.5mm 程度の長石、石英、赤色粒など含む	外面：頸部にヘラ描き沈線 2 条以上、体部ヘラミガキ 内面：全体に摩滅	前期
56	写真のみ	16	57	弥生土器	器台	2	SD01					脚部片	浅黄橙	良	微細～径 2.5mm 程度の石英、長石、赤色粒など含む	外面：ハケの後ナデ、円形透かし 3 箇所残存 内面：ナデ	後期末

第２表　出土土器一覧表（２）

第４章　科学分析

丁・柳ケ瀬遺跡出土弥生土器および縄文土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告は、丁・柳ケ瀬遺跡から出土した弥生土器および縄文土器の材質 (胎土) の特性を明らかにすることにより、既存の分析事例や周辺地質との比較などから、土器の産地に関わる資料を作成する。

１. 試料

試料は、丁・柳ケ瀬遺跡の平成 25 年度調査区から出土した 1 点の弥生土器片と 2 点の縄文土器片の計 3 点の土器片である。試料には試料 No. が付されており、No.49 は弥生土器、No.70 と No.72 は縄文土器とされている。

２. 分析方法

本分析では、蛍光 X 線分析により胎土の化学組成を求める方法を選択する。測定機器はリガク製波長分散型蛍光Ｘ線分析装置（ZSX PrimusⅢ+）を用い、ガラスビード法により分析を実施した。

測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムの FP 定量法を使用し、SiO_2, TiO_2, Al_2O_3, Fe_2O_3, MnO, MgO, CaO, Na_2O, K_2O, P_2O_5 の主要 10 元素および Rb, Sr, Y, Zr, Ba の微量 5 元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料（JA-1, JA-2, JA-3, JB-1a, JB-2, JB-3, JCh-1, JF-1, JF-2, JG-1a, JG-2, JG-3, JGb-1, JGb-2, JH-1, JLk-1, JR-1, JR-2, JR-3, JSd-1, JSd-2, JSd-3, JSl-1, JSl-2, JSy-1）を用いた。

１）装置

㈱リガク製 走査型蛍光 X 線分析装置 ZSX PrimusⅢ+（FP 定量法アプリケーション）

２）試料作製

機械乾燥（110℃）した試料を、振動ミル（平工製作所製 TI100;10ml 容タングステンカーバイト容器）で粉砕・混合し、ガラスビードを表３の条件で作製した。なお、No.49 には土器復元用のモルタル材の付着が認められたため、これを除去した上で処理をした。

第３表　ガラスビード作成条件

溶融装置	リガク製卓上型高周波ビードサンプラ（3091A001）
融剤及び希釈率	融剤（Li2B4O7）5.000g : 試料 0.500g
剥離剤	LiI
溶融温度 , 時間	1200℃, 600sec

３）測定条件

上記作製したガラスビードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光 X 線分析装置（㈱リガク製 ZSX PrimusⅢ+）を用い、表４、表５の条件で測定を実施した。

第４表　蛍光Ｘ線装置条件

ターゲット	Rh
管電圧（kV）	50
管電流（mA）	50
試料マスク	30mm φ
試料スピン	ON
ダイアフラム	30mm φ
測定雰囲気	真空

第 5 表　蛍光 X 線定量測定条件

測定元素	測 定 スペクトル	1 次 フィルタ	アッテ ネータ	スリット	分光 結晶	検出器	PHA		角度 (deg)			計測時間(s)	
							LL	UL	Peak	+BG	−BG	Peak	BG
SiO_2	Si-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO_2	Ti-Kα	OUT	OUT	S2	LIF (200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al_2O_3	Al-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	−	40	20
Fe_2O_3	Fe-Kα	OUT	OUT	S2	LIF (200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-Kα	OUT	OUT	S2	LIF (200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step)	41.50-42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca-Kα	OUT	OUT	S4	LIF (200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na_2O	Na-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K_2O	K-Kα	OUT	OUT	S4	LIF (200)	PC	120	280	136.674	−	142.00	40	20
P_2O_5	P-Kα	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-Kα	OUT	OUT	S2	LIF (200)	SC	100	300	26.598	25.60-25.80 (0.10step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF (200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step)	25.60-25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y-Kα	OUT	OUT	S2	LIF (200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.30-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF (200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-Lα	OUT	OUT	S2	LIF (200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

3. 結果

各試料の元素の含有量比を一覧表にして表 6 に示す。弥生土器の No.49 は縄文土器の 2 点の試料と比較的明瞭な組成の違いを示す。縄文土器試料 2 点間での組成の違いは小さい。弥生土器と縄文土器との間で特に顕著な違いが示された元素は、主要元素では SiO_2、TiO_2、Fe_2O_3、MgO、CaO、K_2O であり、微量元素では Y 以外の 4 元素である。これらのうち、SiO_2 は弥生土器の方が高く、70% 近い値を示し、縄文土器は 55% 程度である。他に主要元素では K_2O、微量元素では Rb、Zr、Ba の各元素において弥生土器の方が高い値を示す。一方、TiO_2、Fe_2O_3、MgO、CaO の各元素においては縄文土器の方が高い値を示す。

第 6 表　蛍光 X 線分析結果（化学組成）

試料 No.	注記	種類	主要元素 (%)										微量元素 (ppm)					Total (%)
			SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Rb	Sr	Y	Zr	Ba	
49	2012157-49	弥生土器	67.06	0.35	16.07	5.60	0.12	0.36	0.72	1.42	2.89	0.15	122	102	14	206	756	94.86
70	2102157-2 -014　実 70	縄文土器	54.94	0.79	17.65	9.53	0.15	2.35	2.12	1.56	1.73	0.37	70	205	17	117	418	91.27
72	2012157-72	縄文土器	55.41	0.85	17.98	9.72	0.11	2.48	1.17	1.34	1.62	0.24	60	123	19	118	476	91.00

４. 考察

弥生土器と縄文土器との間では、胎土の化学組成に有意な違いを認めることができた。これまでに行った播磨平野各地で出土した弥生土器や縄文土器の胎土分析では、胎土中に含まれる砂粒の鉱物・岩石組成に有意な違いが認められている。したがって、胎土の化学組成における有意な違いは、胎土中の砂粒の鉱物・岩石組成の違いを反映していると考えることができる。

矢作・石岡（2009a）では、平成 10 年度に本調査の行われた丁・柳ケ瀬遺跡より出土した弥生土器の胎土分析を薄片観察法により行っている。試料の多くは花崗岩類の岩石片が多く含まれることを特徴とする C 類に分類される胎土であり、そこに少数ではあるが、堆積岩類と凝灰岩・流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類の各岩石片が混在するという組成の A 類に分類される胎土の土器も含まれるという結果が得られている。C 類の胎土にはカリ長石の鉱物片も特徴的に含まれていることも考慮すると、SiO_2 と K_2O の量比の高い No.49 の胎土は、薄片観察による C 類に相当する可能性がある。なお、丁・柳ケ瀬遺跡出土弥生土器の C 類の胎土については、丁・柳ケ瀬遺跡から北北東へ約３km 離れた位置にある桜山岩体と呼ばれる後期白亜紀に貫入した斑状花崗閃緑岩（山元ほか ,2000）からなる丘陵周縁の堆積物に由来すると考えられた。

一方、縄文土器については丁・柳ケ瀬遺跡出土試料の分析事例はないが、丁・柳ケ瀬遺跡から北西へ約２km 離れた位置にある東南遺跡から出土した試料の分析事例がある（矢作・石岡 , 2009b）。この事例では、A 類に分類される胎土の試料が多く認められている。上述したように A 類には凝灰岩や流紋岩が含まれ、東南遺跡出土縄文土器の A 類にはさらに安山岩や緑色岩といった火山岩類や変成岩類も含まれている。これらの岩石には TiO_2、Fe_2O_3、MgO を多く含む有色鉱物が比較的多く含まれ、また CaO を比較的多く含む斜長石の鉱物片も多く含まれていることから、丁・柳ケ瀬遺跡から出土した縄文土器である No.70 と No.72 も A 類の胎土に相当する可能性がある。なお、東南遺跡出土縄文土器の A 類の胎土については、揖保川下流域の堆積物に由来すると考えられた。

以上のことから、化学組成による胎土分析でも、これまでの薄片観察による分析結果とほぼ整合する結果が得られたという評価ができる。特に今回の分析では、矢作・石岡（2009a）では確認することのできなかった丁・柳ケ瀬遺跡から出土した縄文土器の胎土について、東南遺跡とほぼ同様の揖保川下流域の堆積物を材料としている可能性があることを指摘することができた。このことは、揖保川下流域における縄文土器と弥生土器の生産事情が異なっていた可能性があると述べた矢作・石岡（2009a）の考察を補強するものと言える。

引用文献

矢作健二・石岡智武 , 2009a, 丁・柳ケ瀬遺跡出土土器の胎土分析 . 兵庫県文化財調査報告　第 350 冊　丁・柳ケ瀬遺跡Ⅱ　都市計画街路網干線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 , 兵庫県教育委員会 , 16-29.

矢作健二・石岡智武 ,2009b, 東南遺跡出土土器の胎土分析 . 兵庫県文化財調査報告　第 362 冊　東南遺跡 （主） 太子御津線〔街路龍野線〕都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ , 兵庫県教育委員会 , 50-66.

第５章　総　括

前章までで述べたように、今回の調査では縄文時代の遺物、弥生時代の遺構・遺物、古墳時代の遺物、奈良時代の遺構・遺物、鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。

この章ではまとめとして、時代ごとにそれぞれの意義について簡単に述べていきたい。

縄文時代の遺物には２区の下層包含層から出土した土器類がある。深鉢を中心としたこれらの土器群は縄文時代中期末の北白川Ｃ式に比定されるものがほとんどである。これまでも当遺跡では縄文時代の遺物が検出されており、中期末の遺物もその中に含まれる。ただし、既往の調査で発見された中期末の縄文土器は船元式、里木式の範疇で考えられる「西」の土器形式であったが、今回は関東の加曾利Ｅ式の系統に連なる北白川Ｃ式であることが注目される。口縁部に隆帯による円窓状の区画を持ち、そこに垂下する隆帯が加えられた深鉢は加曾利Ｅ式に加え、東海地方の咲畑式の影響下で成立した型式である可能性がある。

弥生時代については２区北西隅で溝が一条検出された。溝自体は出土遺物から後期後半に属するものと考えられるが、後期後半の遺物に交じって前期に属すると思われる土器片も検出されている。１区では弥生時代のものがほとんど見つかっていないため、当該期の居住域は調査地点の北東から東側にかけて、北側の山塊との間にある狭小な平坦面であったと推察される。

なお、第４章の報告にあるように、縄文土器と弥生土器では胎土組成に有意な差があるとの結果が出ているが、これが土器原材料に対する嗜好の差であるのか、年代差による堆積土の変遷に起因するものかは今後も検討する必要があるだろう。

古墳時代については２区の溝から奈良時代の遺物に混じって埴輪片が出土している。小片が多いものの円筒埴輪片に加え、朝顔形埴輪片も含まれており、一定規模の古墳に樹立していたものが流入している可能性、いいかえれば丁瓢塚古墳の埴輪が流入してきた可能性が指摘できる。

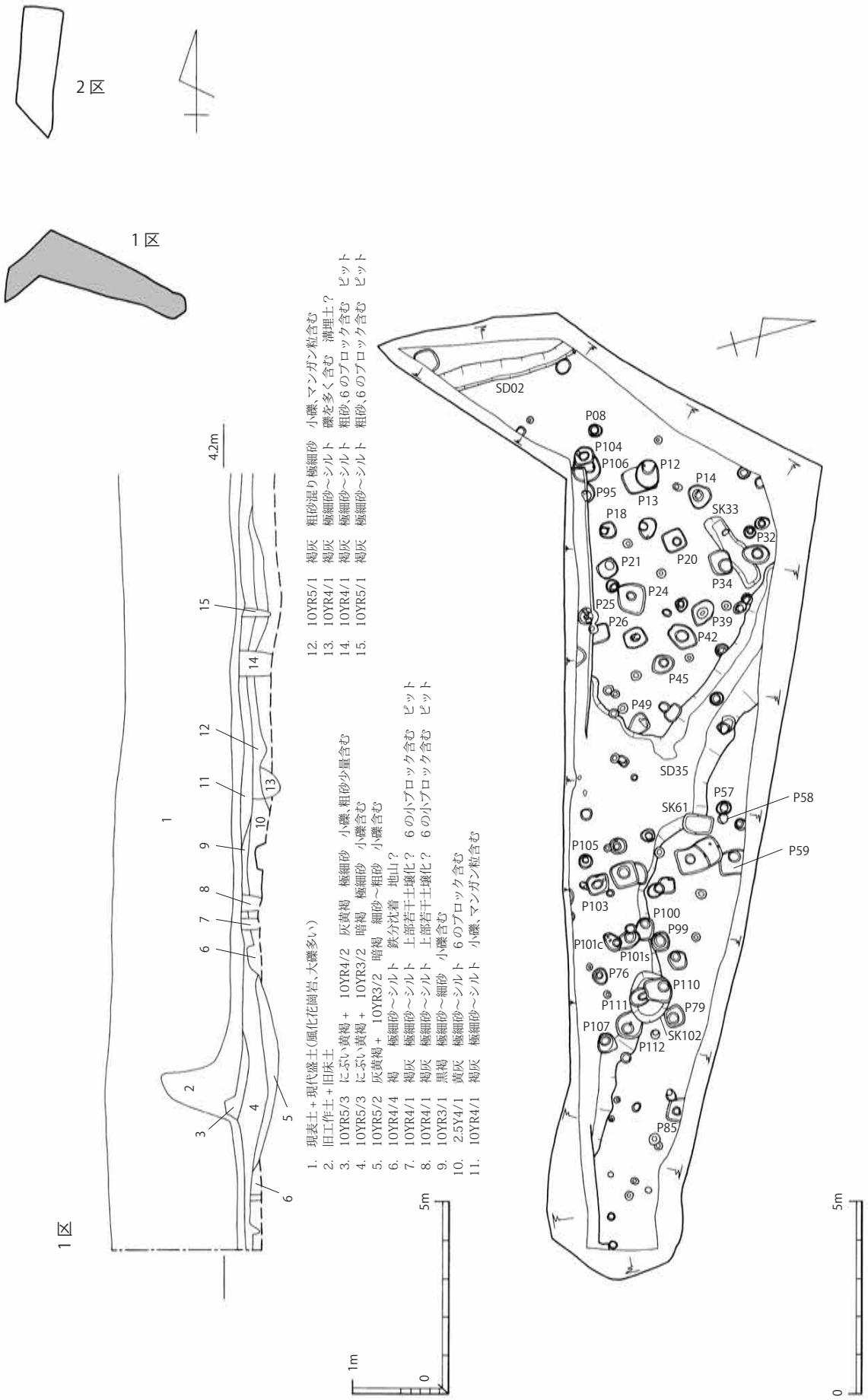
奈良時代の遺構は柱穴群である。平面形態が方形に近く大型のものを含み、底面には根石を設置したものも多く認められる。調査区が狭隘で建物は抽出できなかったが、柱穴間の距離が近く、総柱建物が並んでいた可能性が高い。既往の調査では墨書土器を含む当該期の土器が多数出土しているものの、遺構については不明であたったが、今回の調査でその一端が明らかになった。

平安時代後期についても奈良時代と同じく柱穴群のみの検出である。遺物としては京都系の土師器皿、白磁碗が出土している。柱穴の規格が奈良時代よりも小型になり、密度も低くなるため、側柱建物の一部を検出したと考えられる。平安時代後期から鎌倉時代にかけての当地は領主の変遷はあるものの福井庄の一部となっており、そうした荘園開発に関連した集落の一部を検出したものと考えられる。

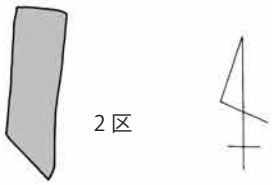
今回の調査は調査面積の狭小さのため遺構の広がりは不明確であったが、既往の調査を補完するような資料を得ることができ、今後の地域史を考えるうえで意義深いものであったと考える。

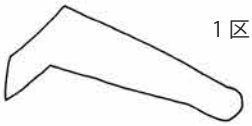
図版

図版 1

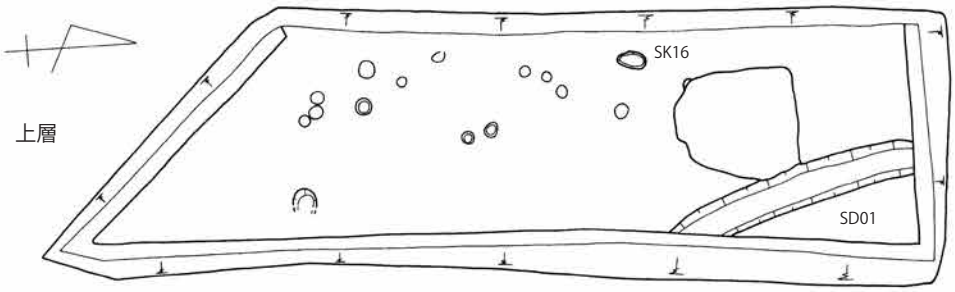


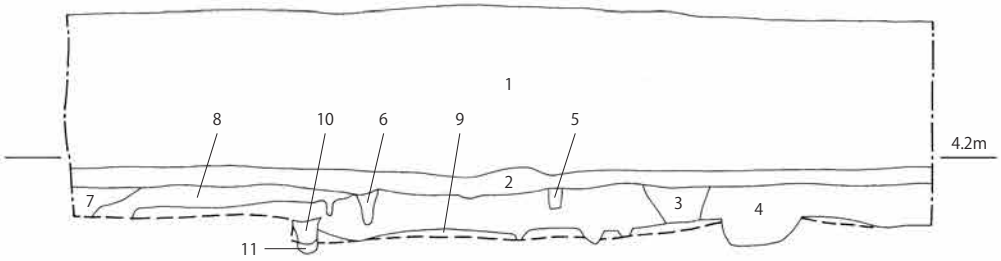
1 区　平面図・断面図



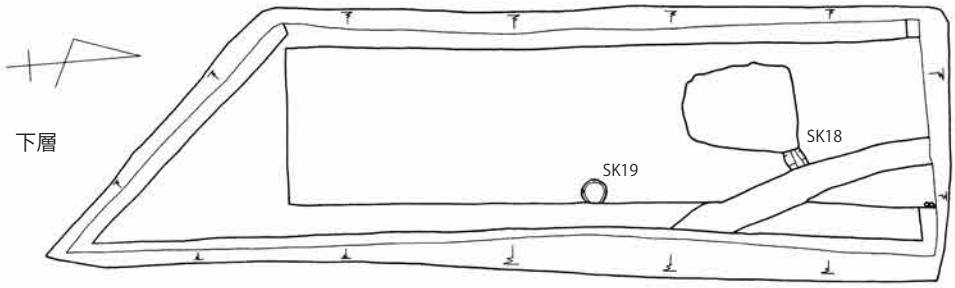


2 区





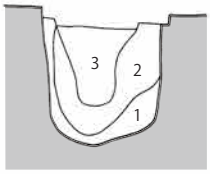
1. 現代盛土および表土
2. 10YR5/2　灰黄褐　粗砂混りシルト(旧床土)
一部上面に 10YR5/1　灰褐　シルト(旧耕土)残存
10YR3/2　黒褐　シルトブロック混入
3. 10YR3/3　暗褐　礫、土器混り極細砂～シルト　遺構埋土
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　粘質シルト　マンガン含む
一部 4/2　灰黄褐(土器含む)となり、土壌化？
4'. 10YR4/3　にぶい黄褐　礫混り粘質シルト(段丘？由来)
5. 10YR3/3　暗褐　極細砂～シルト　遺構(ピット)？
6. 10YR3/3　暗褐　極細砂～シルト　遺構(ピット)？
7. 10YR2/2　黒褐　極細砂～シルト
φ2cm 程度の礫含む(包含層)
8. 10YR3/2　黒褐　極細砂～シルト
φ2 ～ 5cm 程度の礫含む(包含層)
9. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト質極細砂
10. 10YR3/3　暗褐　極細砂質シルト
φ3cm 以下の亜角～亜岡礫含む(土坑)
11. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂(土坑)



2 区　平面図・断面図

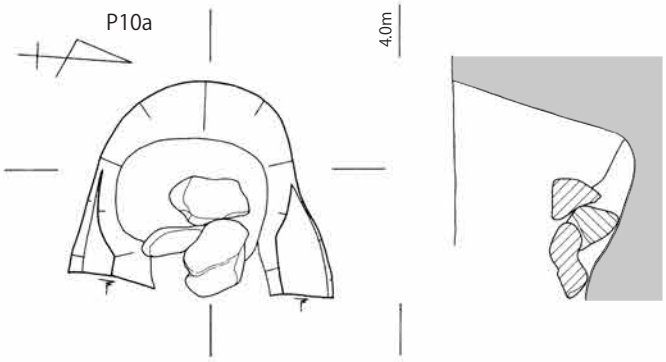
図版 3

P8

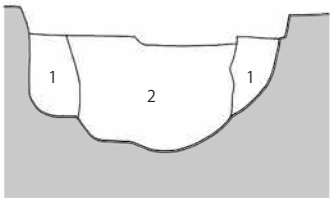


1. 10YR5/2　灰黄褐　　極細砂　Mn、酸化鉄含む
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　極細砂　Mn、酸化鉄含む
3. 10YR4/2　灰黄褐　　極細砂～細砂　Mn、酸化鉄含む

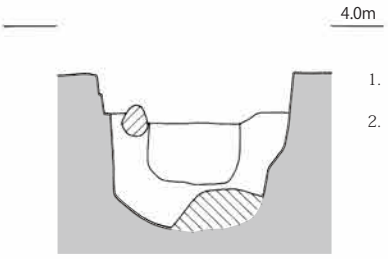
P10a



P10b

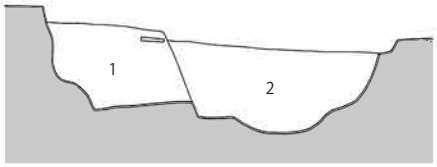


1. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂　Mn、酸化鉄含む
2. 「10a」の埋土　10YR5/2　灰黄褐　極細砂～細砂に
　　10YR5/6　黄褐　　シルト少量混入



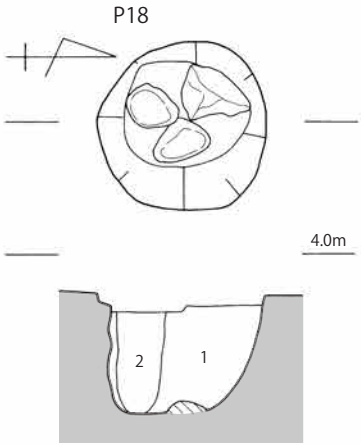
1. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂～細砂に
　　10YR5/6　黄褐　シルト少量混入
2. 1 に比べて黄褐シルト多い

P13　P12



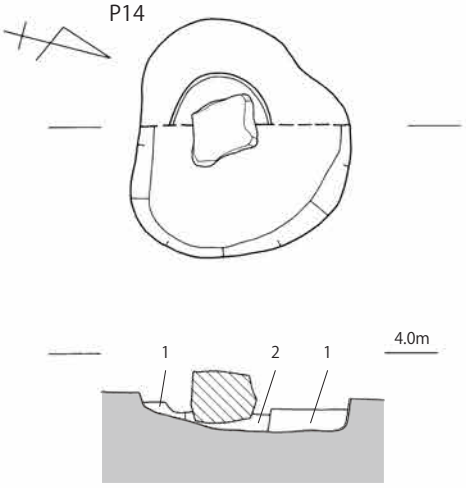
1. 13 埋土　10YR3/2　黒褐　シルトブロックを 10YR4/6　褐
　　極細砂に少量の 10YR5/6　黄褐
　　シルト(地山)ブロック混入　Mn、酸化鉄含む
2. 12 埋土　1 に比べて地山ブロックの混入量が多い　Mn、酸化鉄含む
　　12 の柱痕埋土は 10YR5/2　灰黄褐　極細砂

P18



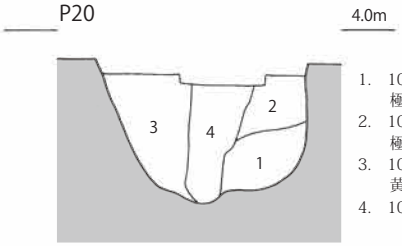
1. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～シルトに
　　10YR4/6　褐　シルトブロック混入
2. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～シルト

P14



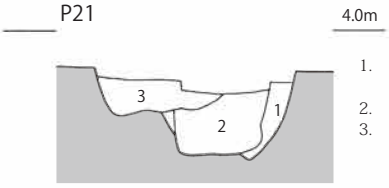
1. 10YR5/1　灰褐　極細砂に少量の 10YR5/6
　　黄褐　シルト(地山)ブロック混入
2. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂　Mn、酸化鉄含む

P20



1. 10YR5/6　黄褐　シルト
　　極少量の 10YR4/1　灰褐　極細砂混る
2. 10YR4/1　灰褐　極細砂
　　極少量の 10YR5/6　黄褐　シルト混る
3. 10YR4/1　灰褐　極細砂と 10YR5/6
　　黄褐　シルトがほぼ同量混在
4. 10YR4/1　灰褐　極細砂

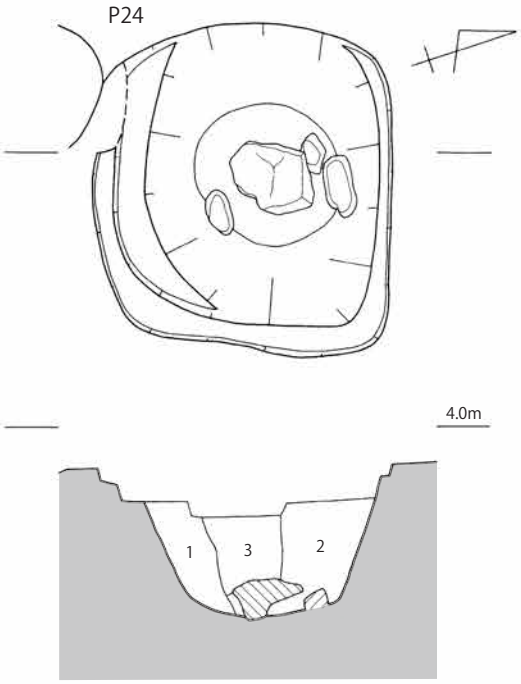
P21



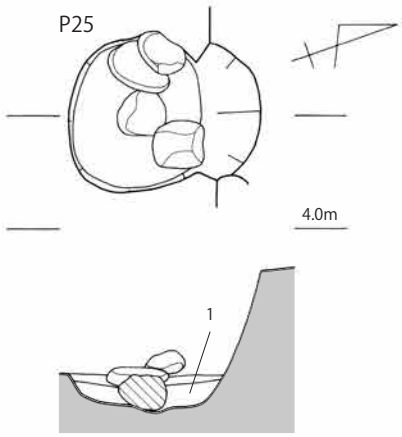
1. 10YR4/6　褐　シルト　10YR4/2
　　灰黄褐　極細砂ブロック含む
2. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～シルト
3. 10YR4/1　褐灰　　極細砂～シルト

0　1m

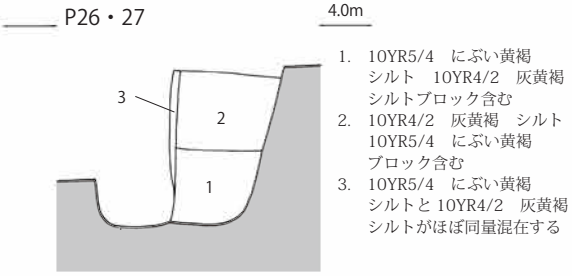
1 区　遺構図（1）



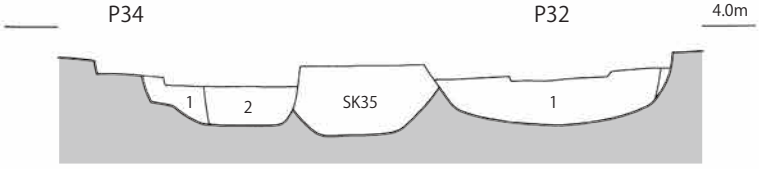
1. 10YR5/6　黄褐　　シルトに極少量の 10YR5/2　灰黄褐　極細砂混入
2. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂に少量の 10YR5/6　黄褐　シルト混入
3. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂に少量の 10YR5/6　黄褐　シルト混入



1. 10YR4/2　灰黄褐　砂質シルト　10YR5/4　にぶい黄褐
砂質シルト　ブロック状埋土

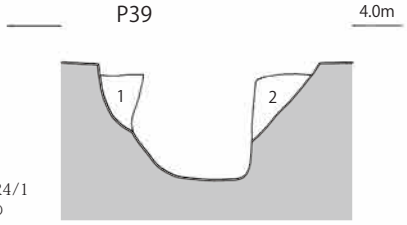


1. 10YR5/4　にぶい黄褐
シルト　10YR4/2　灰黄褐
シルトブロック含む
2. 10YR4/2　灰黄褐　シルト
10YR5/4　にぶい黄褐
ブロック含む
3. 10YR5/4　にぶい黄褐
シルトと 10YR4/2　灰黄褐
シルトがほぼ同量混在する

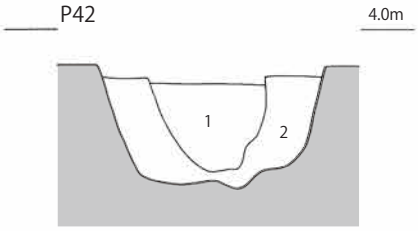


1. 10YR5/6　黄褐　シルトに 10YR4/1　灰褐
極細砂ブロックと極少量の 10YR3/2　黒褐　ブロック混入
2. 10YR4/1　灰褐　極細砂に 10YR5/6　黄褐　シルトブロック混入

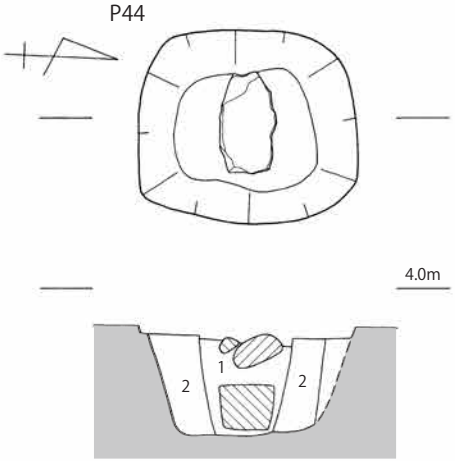
1. 10YR5/6　黄褐　シルトに 10YR4/1
灰褐　極細砂ブロックと極少量の
10YR3/2　黒褐　ブロック混入



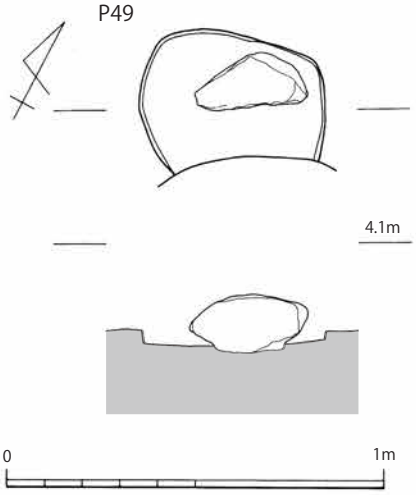
1. 10YR4/2　灰黄褐　　シルト質極細砂
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂

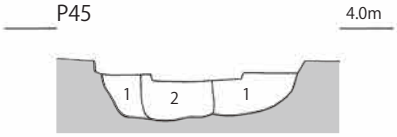


1. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂
2. 10YR4/2　灰黄褐　　シルト質極細砂



1. 10YR4/2　灰黄褐　砂質シルト
地山のブロックφ4ｃm以下を散漫に含む
2. 10YR5/6　黄褐～ 10YR4/6　褐
砂質シルト(地山)のブロックを主体とする人為埋土



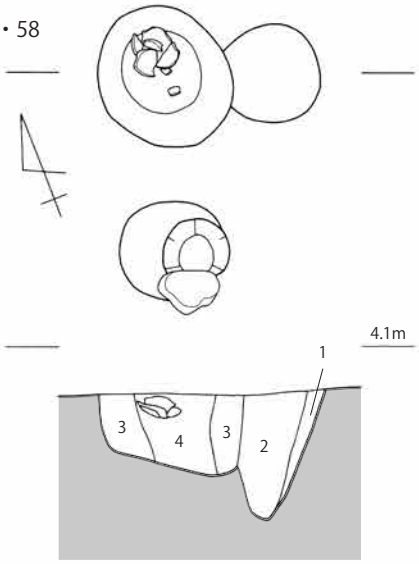


1. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂　7.5YR3/2　黒褐　極細砂ブロック
10YR4/6　褐　極細砂ブロック含む
2. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂
7.5YR3/2　黒褐　ブロック　10YR4/6　褐　ブロックが 1 より少ない

1 区　遺構図（2）

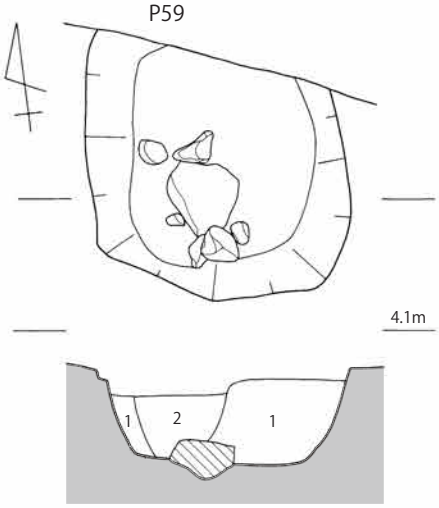
図版 5

P57・58



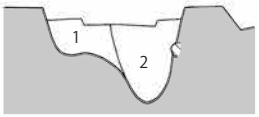
1. 10YR4/4　褐　粗砂混り極細砂に②ブロック含む
2. 10YR2/3　黒褐～ 10YR3/3　暗褐　粗砂混り極細砂
3. 10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂に 10YR4/4　褐　極細砂ブロック混る
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂　極少量の 10YR4/4　褐
極細砂ブロック混入

P59



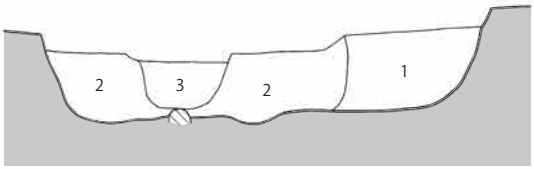
1. 10YR3/4　暗褐　粗砂混り極細砂～シルトに 10YR4/4　褐
極細砂ブロック混入
2. 10YR3/4　暗褐　極細砂～シルト

P63



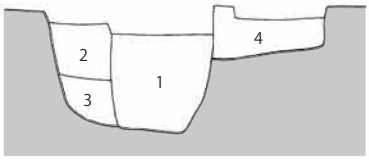
1. 10YR3/2　黒褐　粗砂混り極細砂
2. 10YR2/3　黒褐　極細砂　極少量の 10YR4/3　にぶい黄褐
極細砂ブロック含む

P60a・b



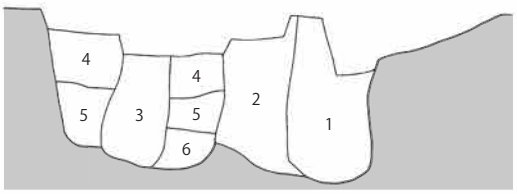
1. 10YR3/2　黒褐　礫混りシルト
2. 10YR3/2　黒褐　小礫混り粗砂～極細砂
3. 10YR3/2　黒褐　極細砂～シルト

P67



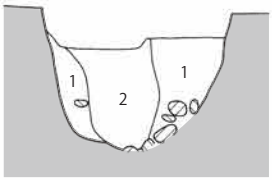
1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂
10YR5/4　にぶい黄褐　砂質シルト(地山)のブロックを含む
2. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　砂質シルト　地山のブロックか
4. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂　地山のブロックを多量に含む

P64



1. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～細砂(P115 柱痕)
2. 1 と 10YR5/6　黄褐　シルト質極細砂の相互ブロック状埋土(P115)
3. 10YR3/2　黒褐　極細砂(P64)
4. 10YR3/2　黒褐　極細砂と 10YR5/6　黄褐　シルト質極細砂の相互ブロック状埋土
5. 4 とほぼ同じだが、黄色系ブロックの含有が多い
6. 5 よりさらに黄褐色ブロックが多い

P69

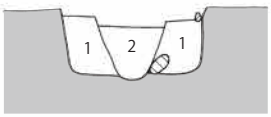


1. 10YR3/1　黒褐　礫、粗砂混り極細砂　10YR4/4　褐
極細砂～細砂ブロック含む
2. 10YR3/2　黒褐　極細砂　小礫、粗砂含む

P71

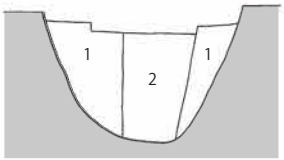
1. 10YR3/3　黒褐　極細砂　粗砂、礫混り

P76



1. 10YR3/2　黒褐　極細砂～シルト　粗砂、礫混り
2. 2.5Y3/2　黒褐　粗砂混り極細砂～シルト

P79

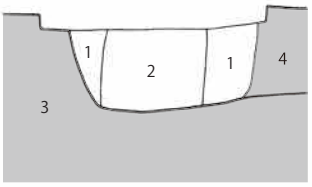


1. 10YR3/3　黒褐　小礫混り粗砂～極細砂
2. 10YR3/3　黒褐　小礫混り細砂～極細砂

0　1m

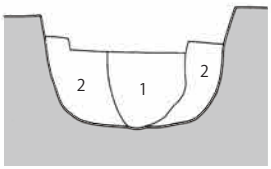
1 区　遺構図（3）

P85



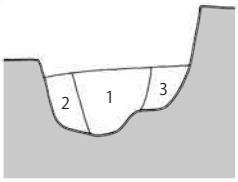
1. 10YR3/2　黒褐　極細砂 4 ブロック含む
2. 10YR2/3　黒褐　極細砂　小礫含む
3. 10YR3/3　暗褐　礫を多量に含む極細砂(ベース)
4. 10YR4/4　褐　　極細砂～シルト(粗砂含む)(ベース)

P99



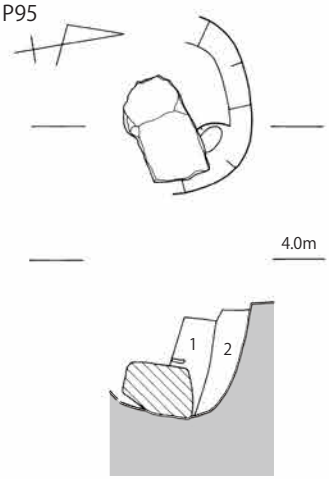
1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂　10YR5/4　にぶい黄褐
   砂質シルト(地山)のブロックを少量含む
2. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂　地山　相互ブロック状埋土

P100



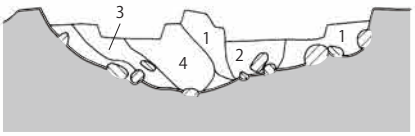
1. 10YR3/2　黒褐　シルト質極細砂と 10YR5/4　にぶい黄褐
   砂質シルト(地山)の相互ブロック状埋土
2. 1 とほぼ同じだが、地山ブロックが多い
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　砂質シルト　地山の大ブロックか

P95



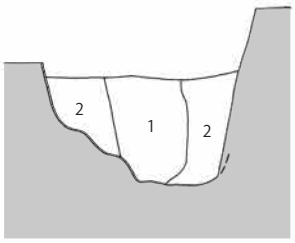
1. 10YR5/1　褐灰　　極細砂～細砂　Mn 含む
2. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂

P101a・c



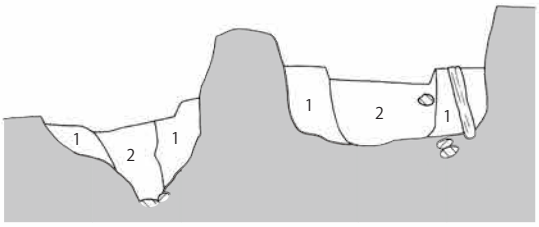
1. 10YR3/2　黒褐　粗砂混りシルト　礫含む　10YR5/3　にぶい黄褐
   シルトブロック少量含む
2. 10YR3/2　黒褐　粗砂混りシルト　礫含む　10YR5/3　にぶい黄褐
   シルトブロック含む
3. 10YR3/2　黒褐　粗砂混りシルト　10YR5/3　にぶい黄褐
   ブロック少量含む
4. 10YR2/2　黒褐　粗砂混り粘質シルト

P103



1. 10YR3/2　黒褐　シルト質極細砂(柱痕)
2. 10YR3/3　暗褐　シルト質極細砂　10YR5/4　にぶい黄褐
   砂質シルト(地山)のブロックを含む

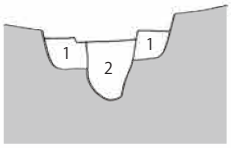
P107　P112



1. 10YR3/2　黒褐　　細砂～シルト
   10YR6/6　明黄褐
   シルトブロック・礫混入
2. 10YR3/2　黒褐　　細砂～シルト

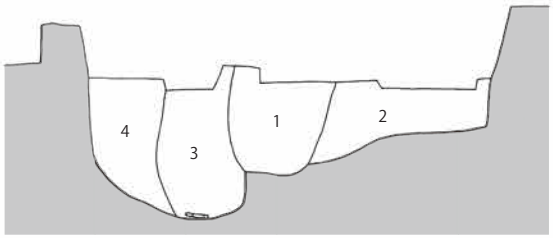
1. 10YR4/2　灰黄褐　細砂～シルト　礫混入
   10YR6/6　明黄褐　シルトブロック少量混る
2. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～シルト
   10YR6/6　明黄褐　シルトブロック極少量混る

P105



1. 10YR3/2　黒褐　極細砂～シルト
2. 10YR3/3　暗褐　極細砂～シルト

P110・111



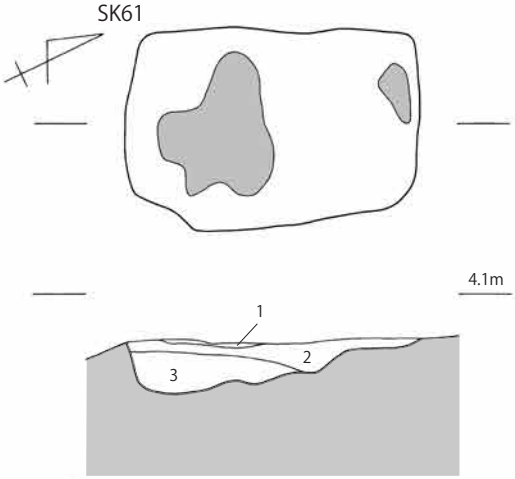
1. 10YR3/3　暗褐　　シルト質極細砂～砂質シルト(P110 の柱痕)
2. 10YR3/4　暗褐　　シルト質極細砂と 10YR4/3　にぶい黄褐　細礫混細砂の相互ブロック状埋土
3. 10YR3/2　黒褐　　砂質シルトと 10YR4/3　にぶい黄褐
   シルト質砂の相互ブロック状埋土(P111 柱痕)
4. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質細砂

0　1m

1 区　遺構図(4)

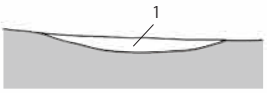
図版 7

SK61



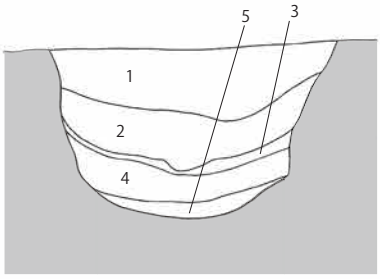
1. 炭層
2. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂
3. 10YR4/2　灰黄褐　シルト混細砂～中砂

SD02



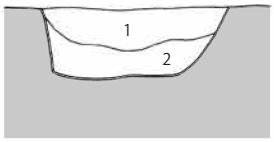
1. 10YR5/3　にぶい黄褐　極細砂～細砂

SD01



1. 10YR3/3　暗褐　極細砂～シルト　礫・土器含む(東壁断面「３」と同じ)
2. 10YR2/3　黒褐　シルト　炭化物・礫・土器含む
3. 10YR4/3　にぶい黄褐　粘質シルト　(東壁断面「４」と同じ)
   ベース土の再流入と酸化鉄の凝集で生じた偽地山
4. 10YR3/1　黒褐　砂混りシルト～シルト質極細砂　下部でシルト化が強い
5. 10YR3/2　黒褐　シルト質細砂～粗砂

SK33

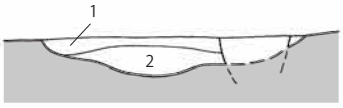


1. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂　10YR5/4　にぶい黄褐
   シルト混極細砂(地山)のブロックを含む
2. 10YR4/1　褐灰　シルト質極細砂　10YR5/4　にぶい黄褐
   シルト混極細砂(地山)のブロックを含む

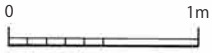
SK102

1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト混極細砂　φ２cm 以下の礫を含む

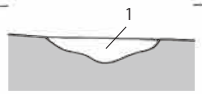
SD35



1. 10YR3/2　黒褐　　極細砂
2. 10YR4/2　灰黄褐　砂礫　礫はφ10cm 以下　φ３cm 以下が主体
   亜円礫、マトリックスは同色のシルト混砂(淘汰悪い)

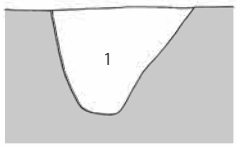


SK16



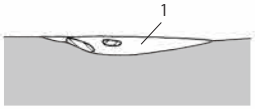
1. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂

SK18

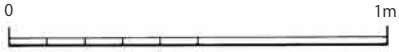


1. 10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂質シルト
   φ１cm 以下の礫を含む　Mn 斑多く含む

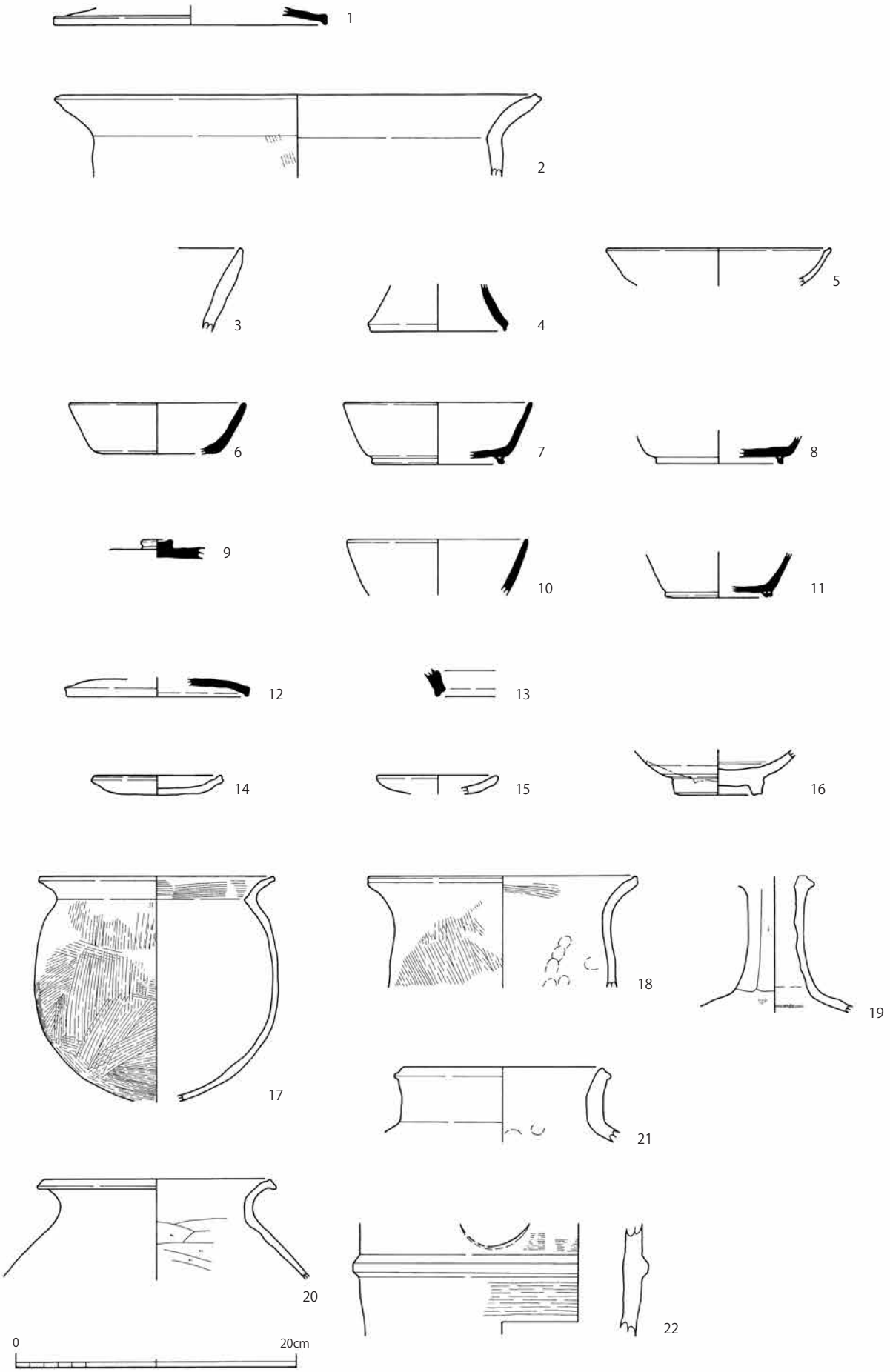
SK19



1. 10YR4/2　にぶい黄褐　シルト質極細砂
   φ５cm 以下の亜円礫、土器砕片含む

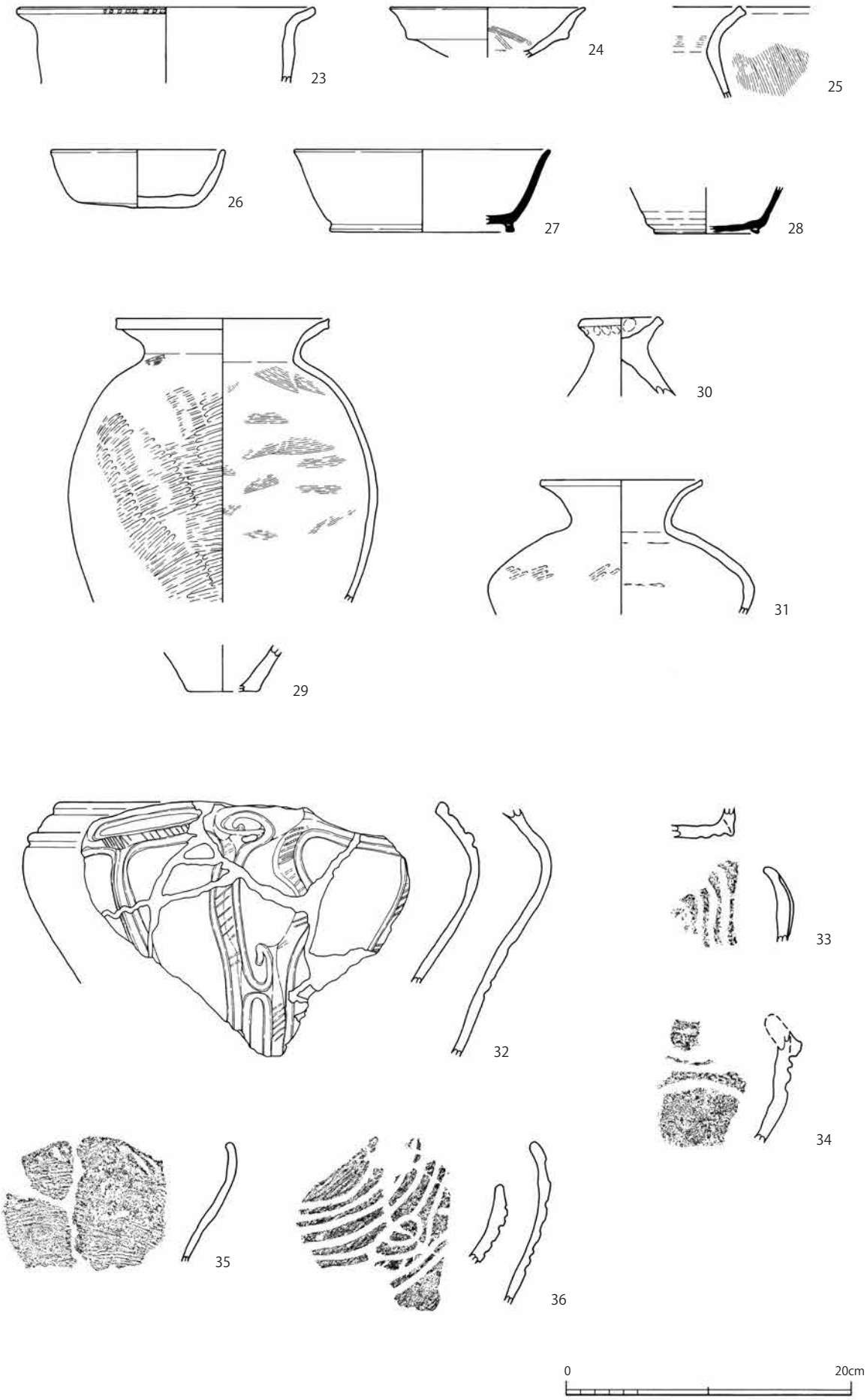


1区　遺構図(５)・２区　遺構図

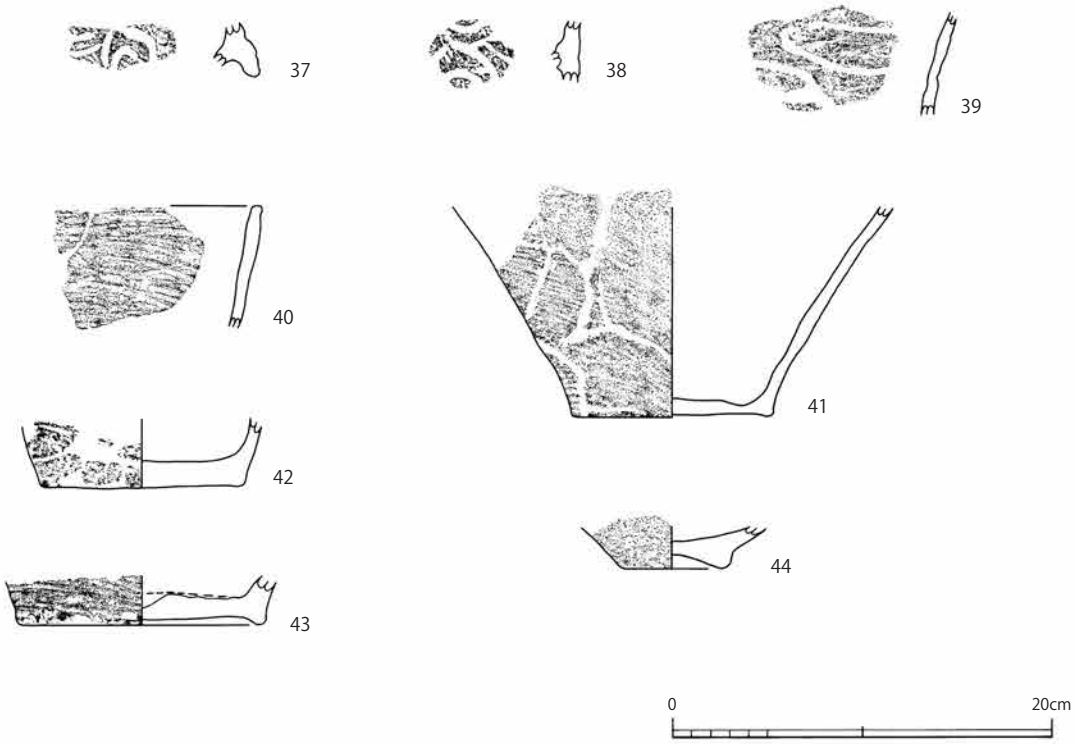


出土遺物　土器・陶磁器（1）

図版 9

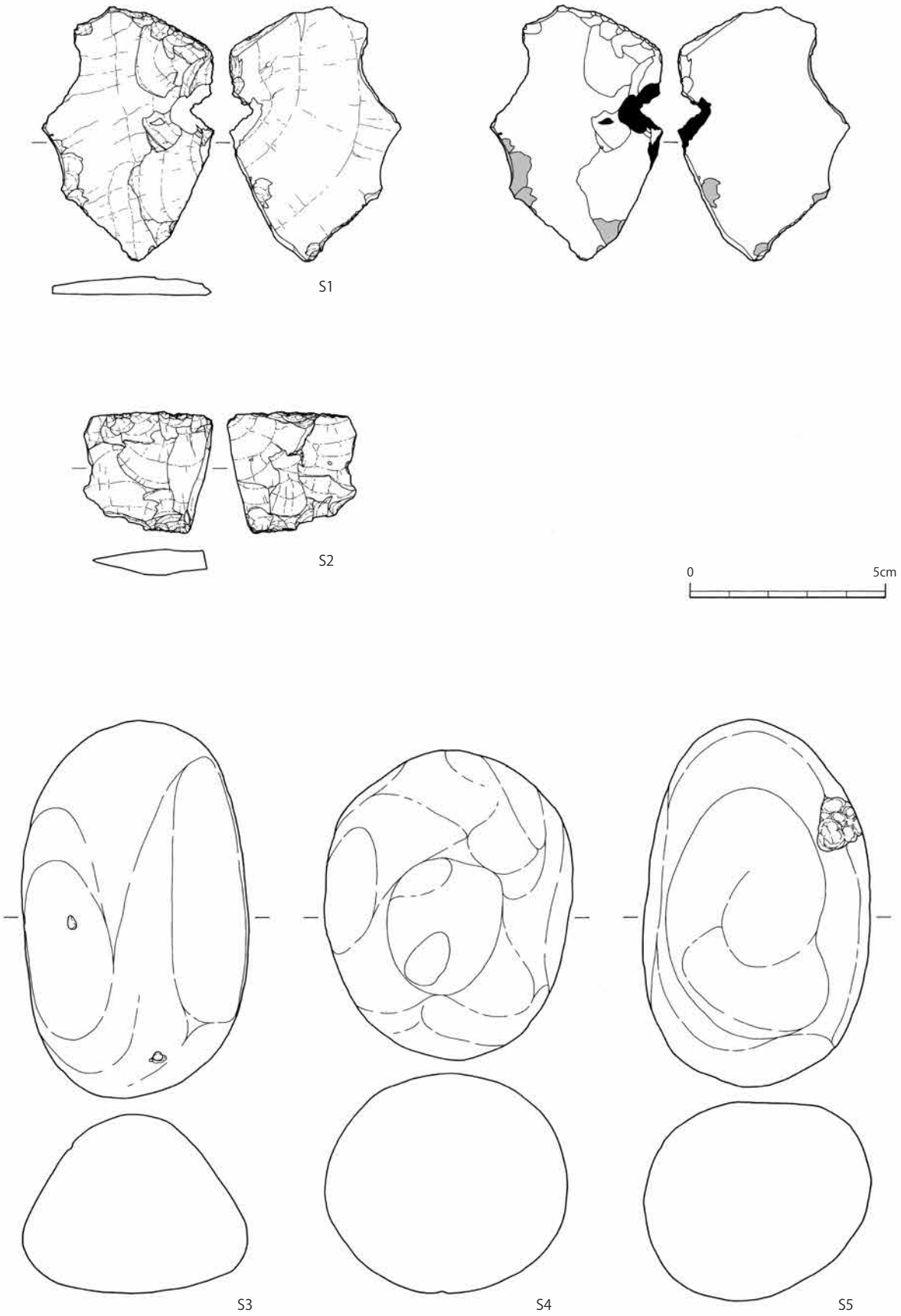


出土遺物　土器・陶磁器（2）



出土遺物　土器・陶磁器（3）

図版 11



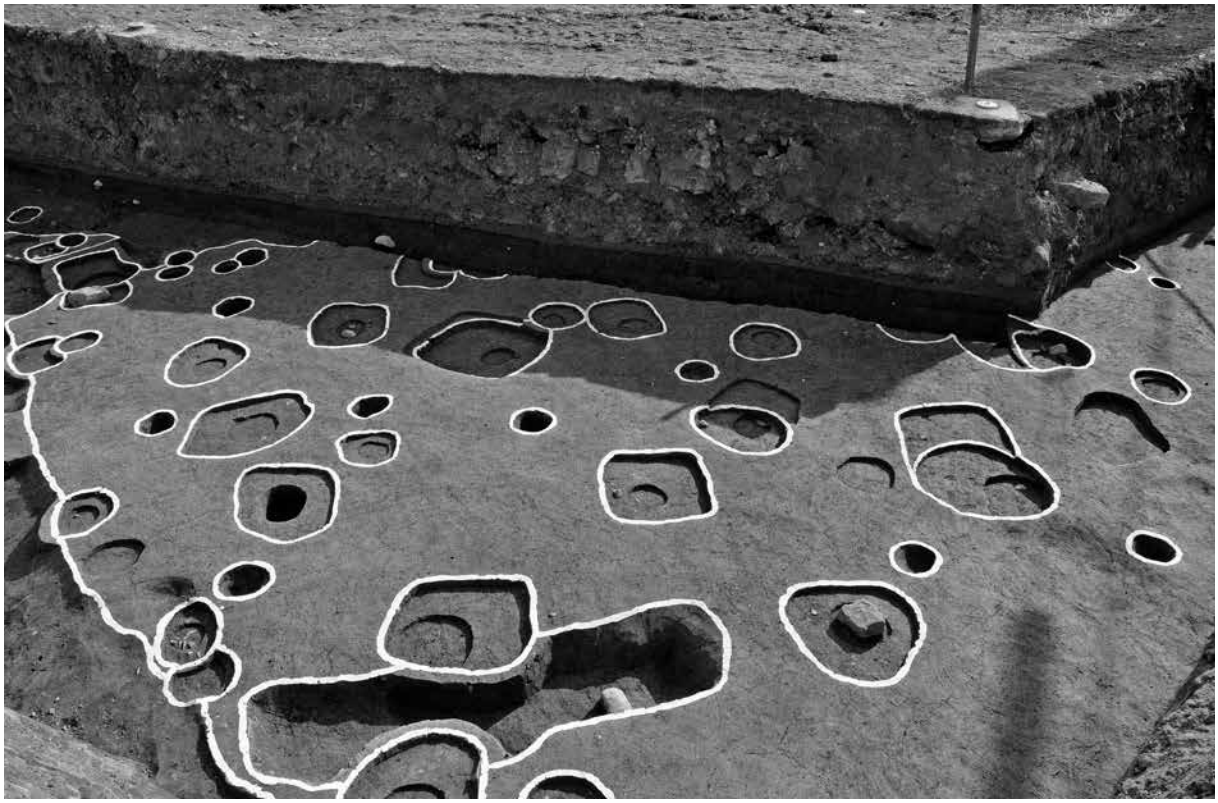
出土遺物　石器・石製品

写真図版

写真図版１　遺構１区

１区全景（東から）

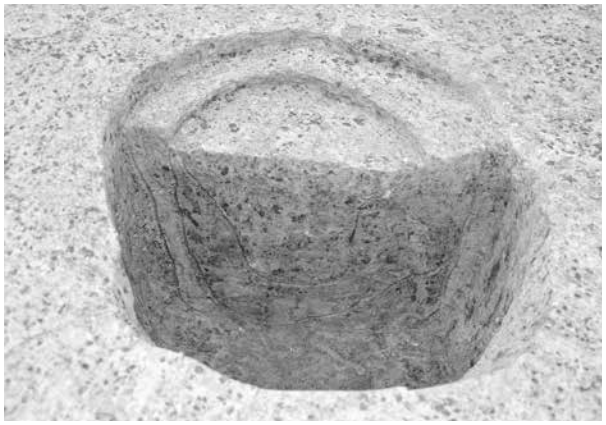
１区全景（西から）



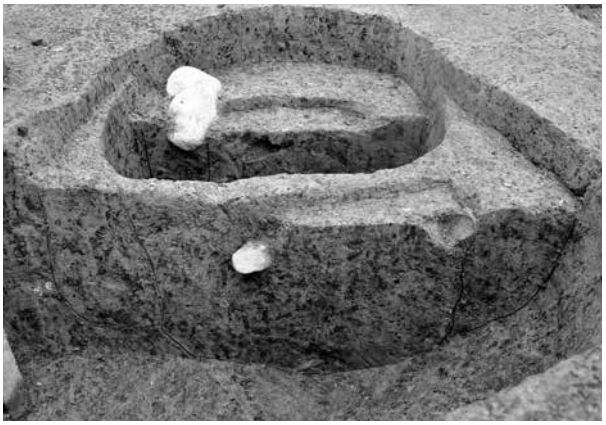
１区　西部　遺構（北から）

１区　中央部　遺構（北から）

写真図版３　遺構１区

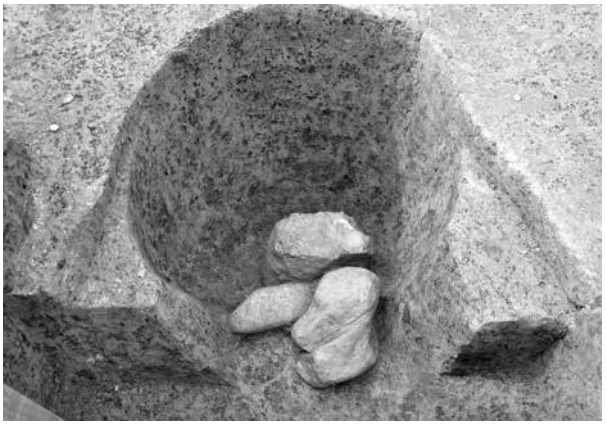


P08 断割（東から）

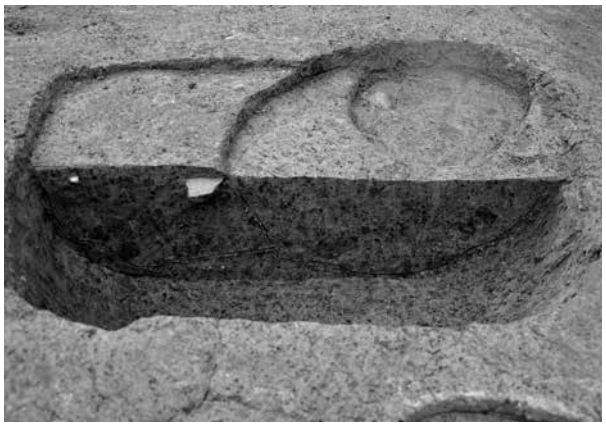


P10b 断割（東から）

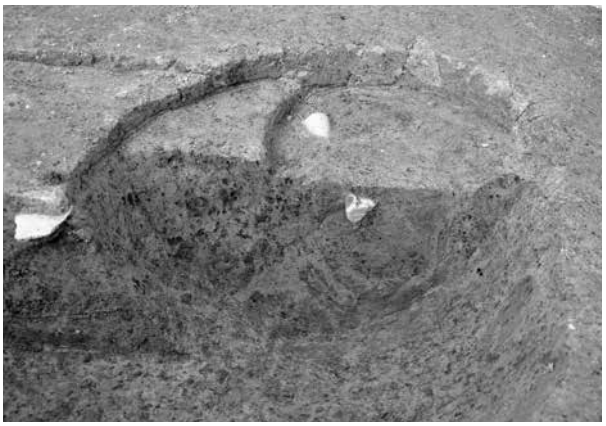
P10a 断割（東から）



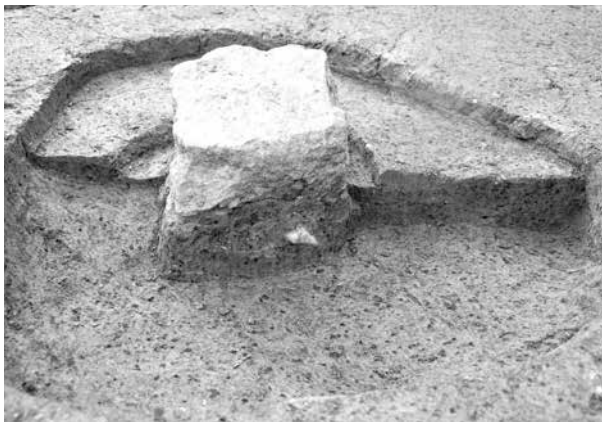
P10a 根石（東から）



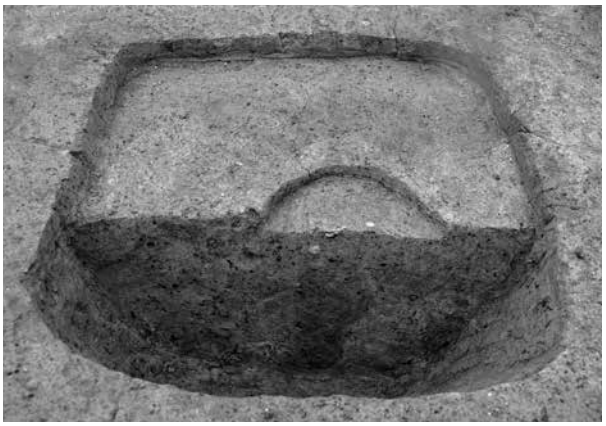
P12・13 断割（東から）



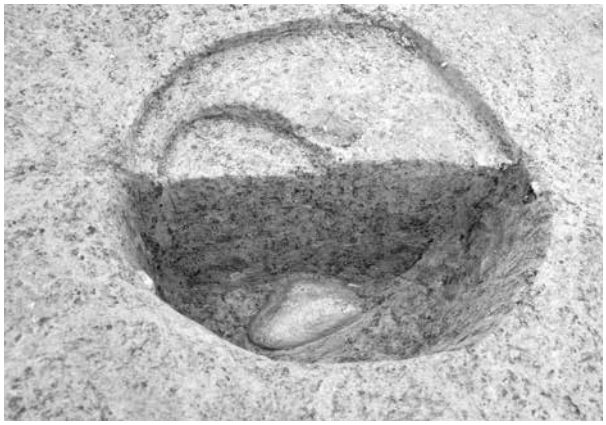
P12 断割（東から）



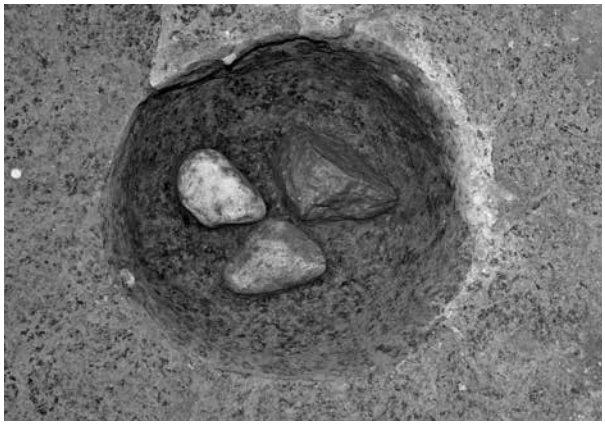
P14 断割（東から）



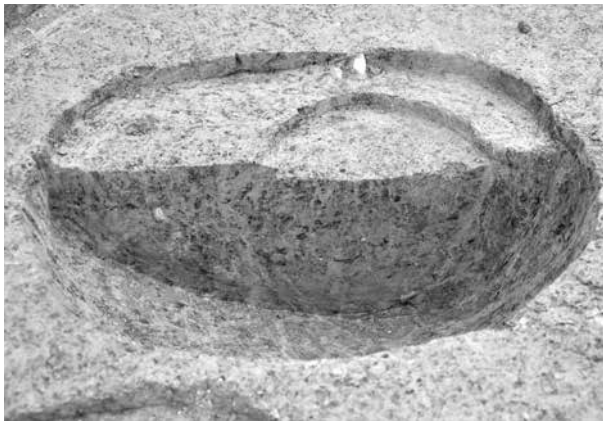
P20 断割（東から）



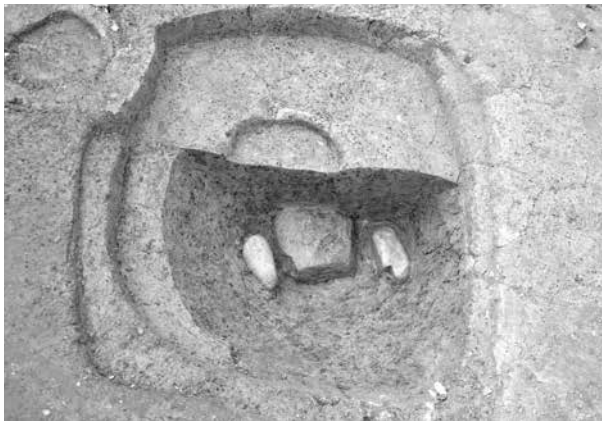
P18 断割（東から）



P18 根石（東から）

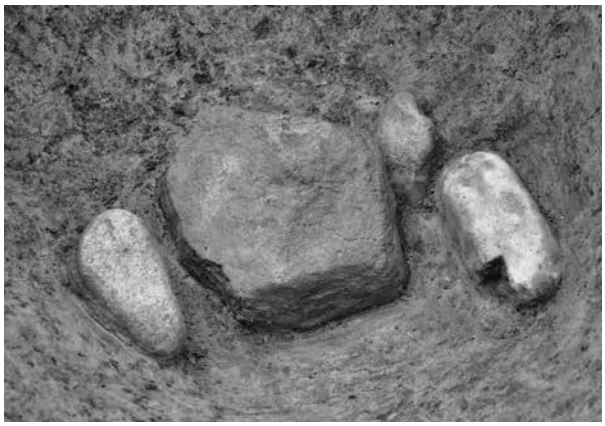


P21 断割（東から）

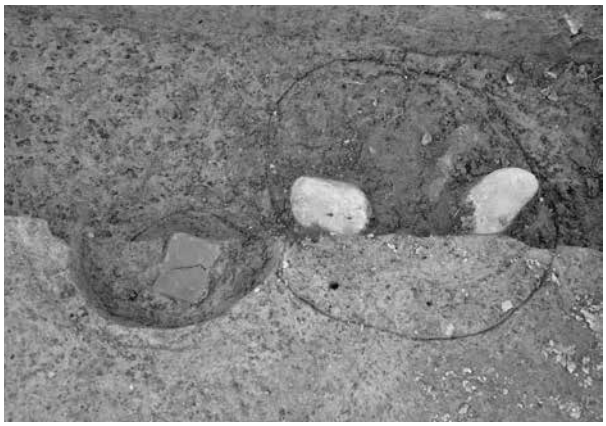


P24 断割（東から）

P24 完掘（東から）



P24 根石（東から）

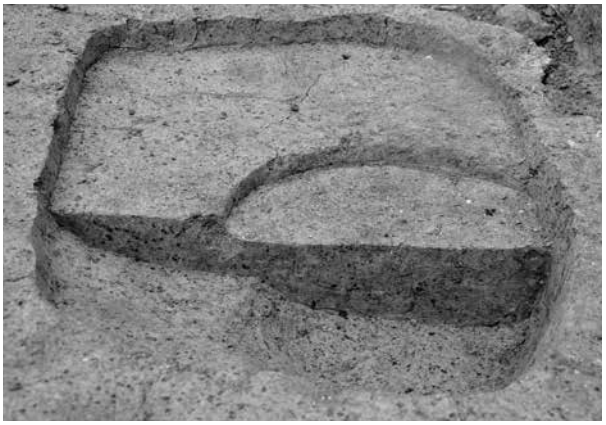


P26 遺物出土状況（北から）

P26 断割（東から）

写真図版５　遺構１区

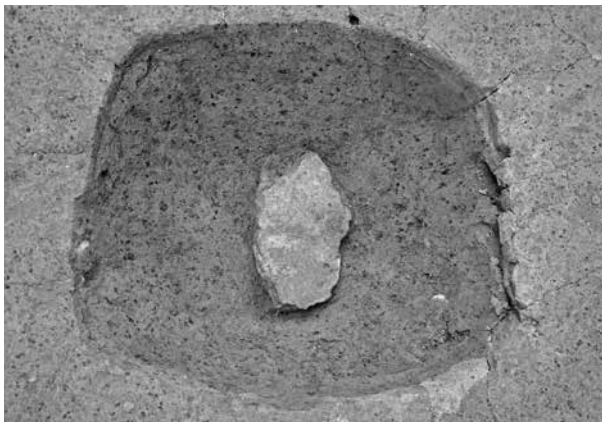
P32 断割（東から）



P34 断割（東から）

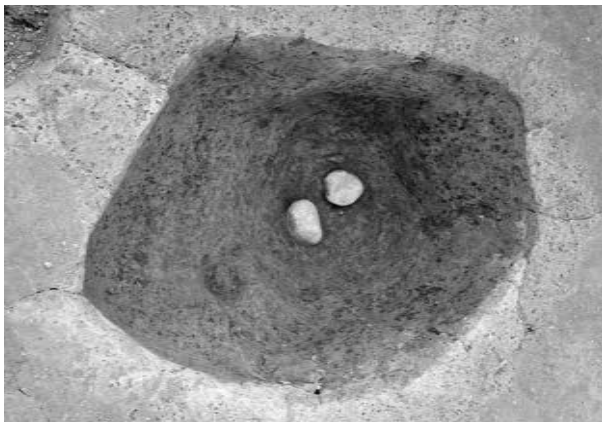
P39 断割（東から）

P44 断割（東から）

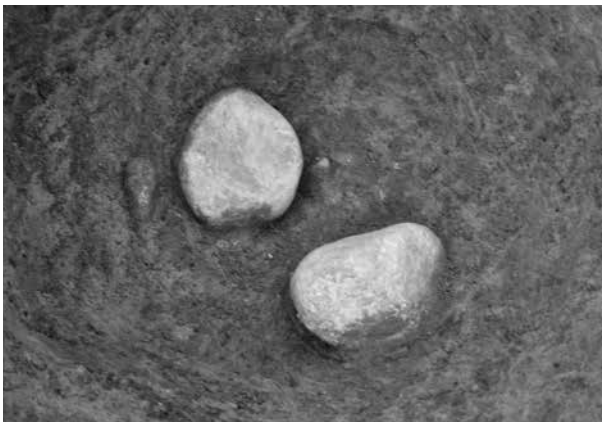


P44 根石（東から）

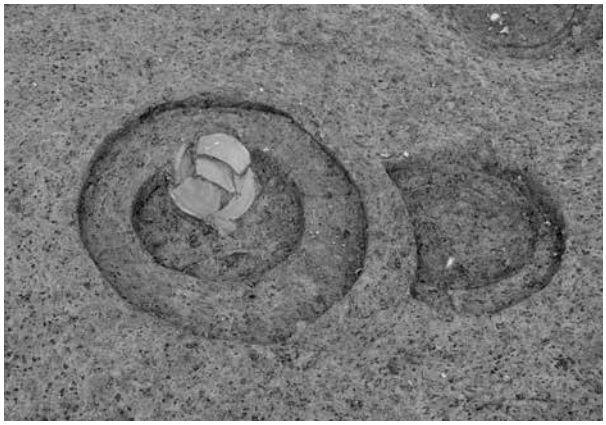
P44 根石（南から）



P42 根石（北東から）



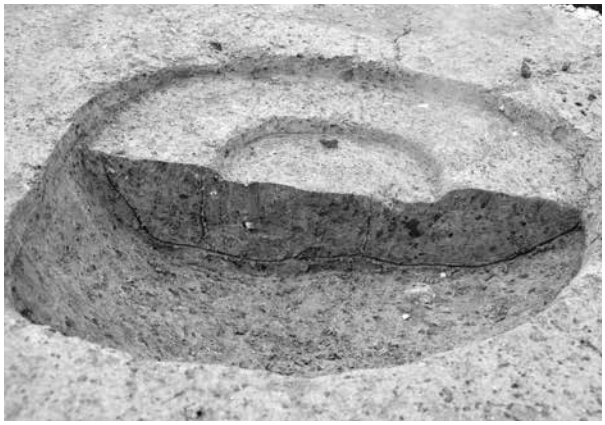
P42 根石（南から）



P57 遺物出土状況（南から）

P57 遺物出土状況　報 26（南から）

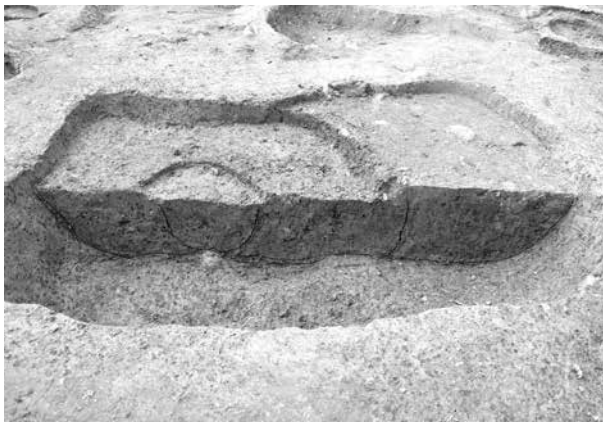
P57・58 断割（南から）



P45 断割（南から）

P59 断割（南から）

P59 根石（南から）

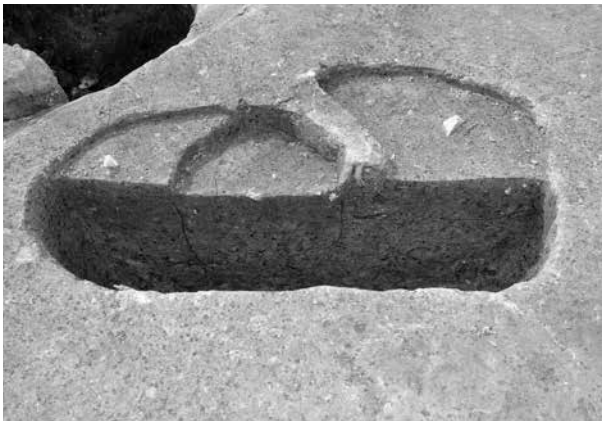


P60a・P60b 断割（東から）

P63 断割（東から）

写真図版７　遺構１区

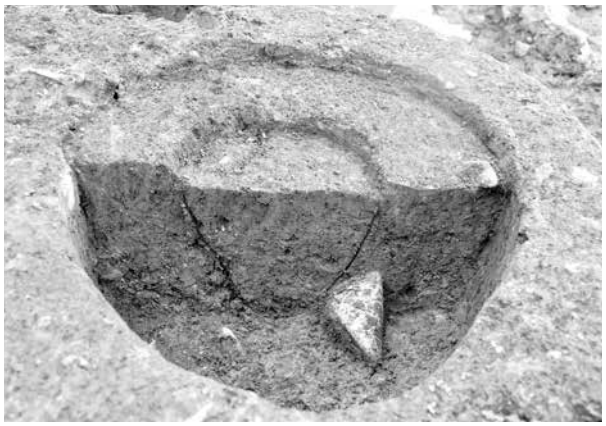
P64a・P115 断割（東から）



P66・P67 断割（東から）

P69 断割（東から）

P71 断割（東から）



P76 断割（東から）

P79 断割（東から）

P85 断割（東から）

P95 断割（東から）

P88 遺物出土状況（南東から）

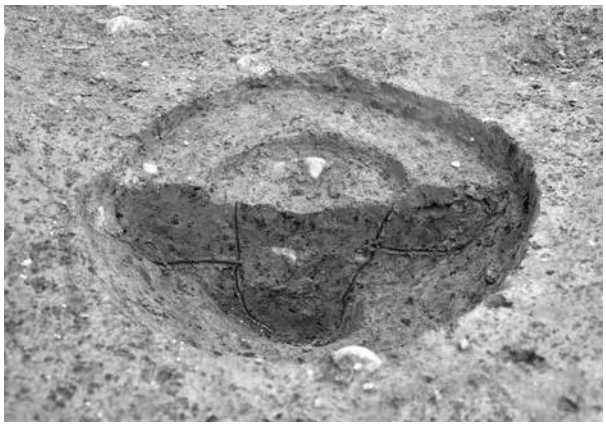
P88 遺物出土状況　報 16（南東から）

P99 断割（南から）

P100 断割（東から）

P101a・P101c 断割（南から）

P103 断割（東から）



P105 断割（東から）

P107 断割（東から）

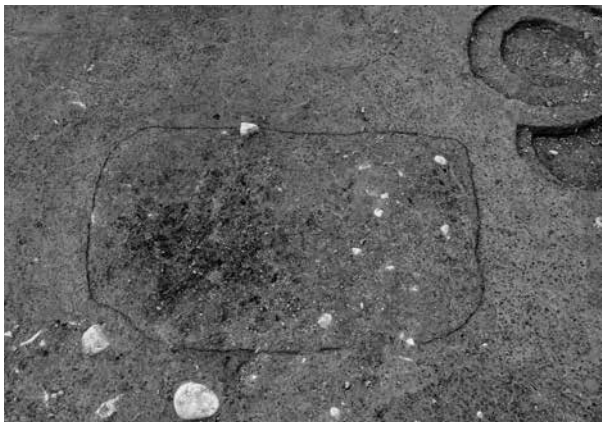
写真図版９　遺構１区

P110・P111 断割（東から）

P111 柱痕遺物出土状況（東から）

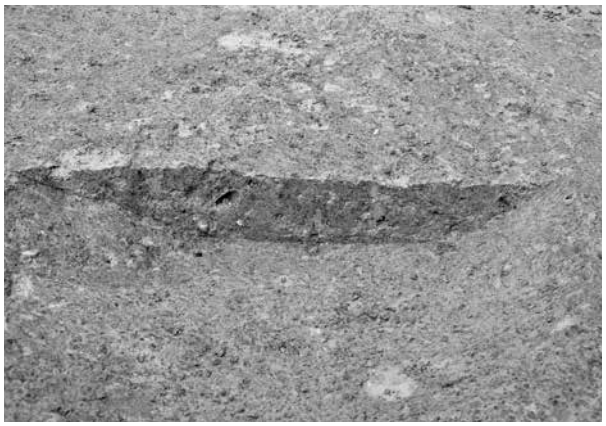
P112 断割（東から）

SK33 断面（西から）



SK61 炭層面検出状況（東から）

SK61 断面（東から）



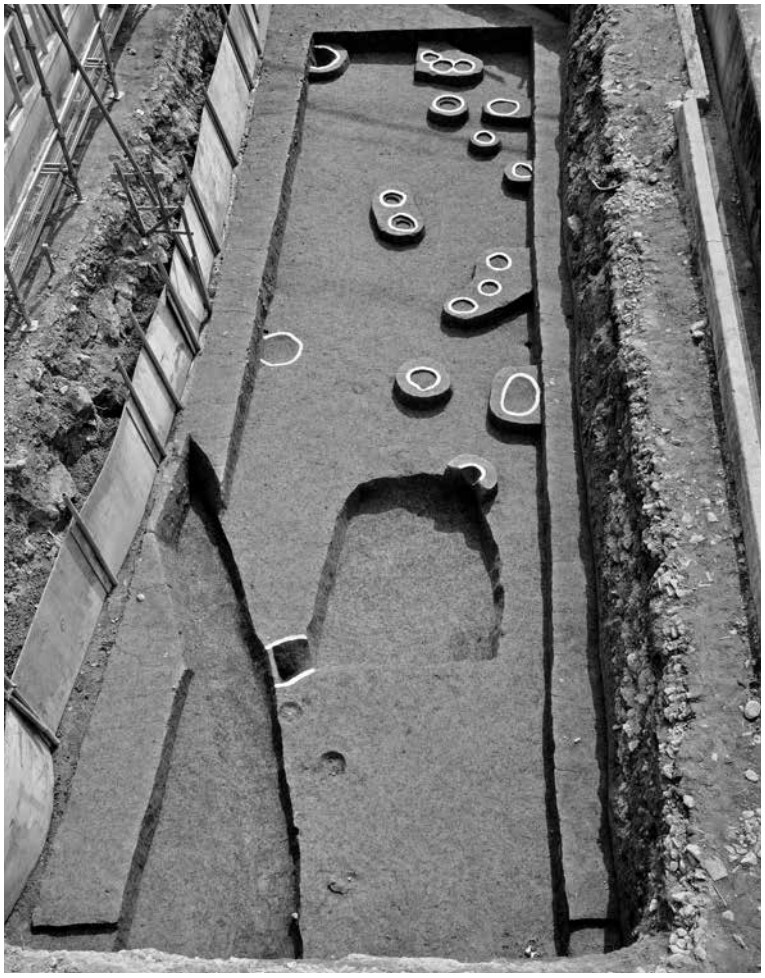
SK102 断面（東から）

SD35 断面（南東から）

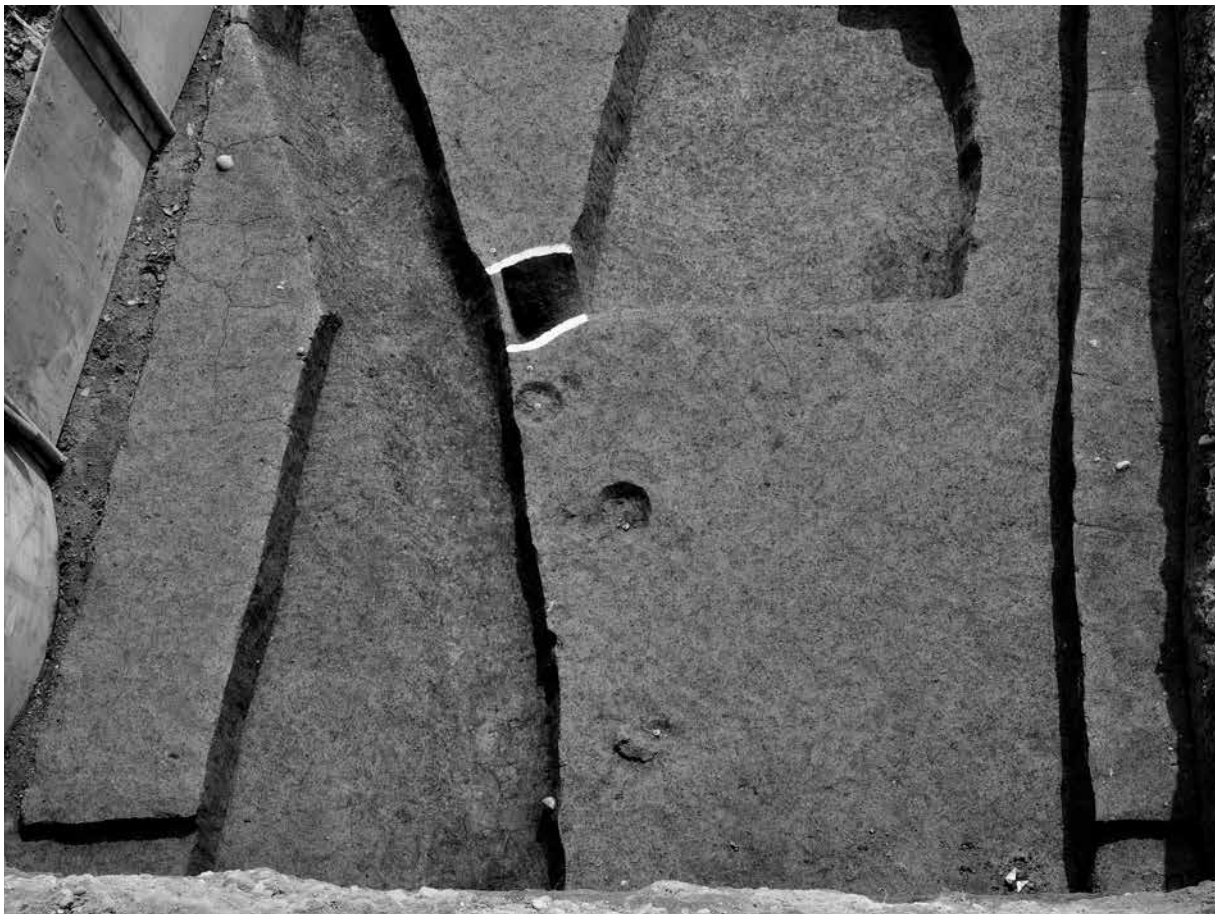
２区　上層遺構面全景（北から）

２区　上層遺構面部分（北から）

写真図版 11　遺構２区



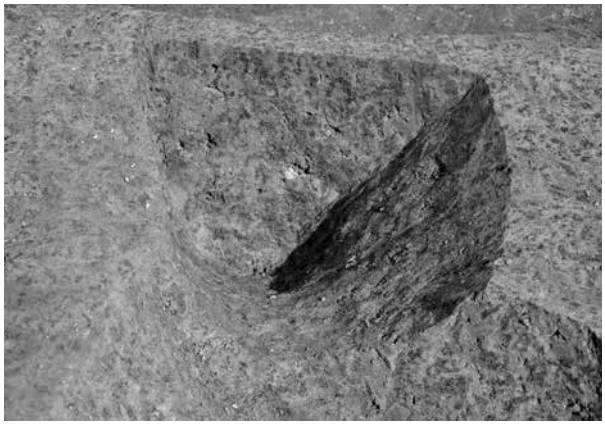
２区　下層遺構全面（北から）



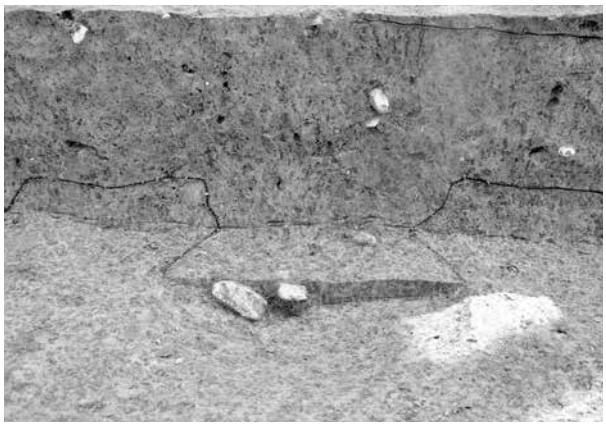
２区　下層遺構面部分（北から）

SD01 断面　北壁（南から）

SK16 断面（南から）



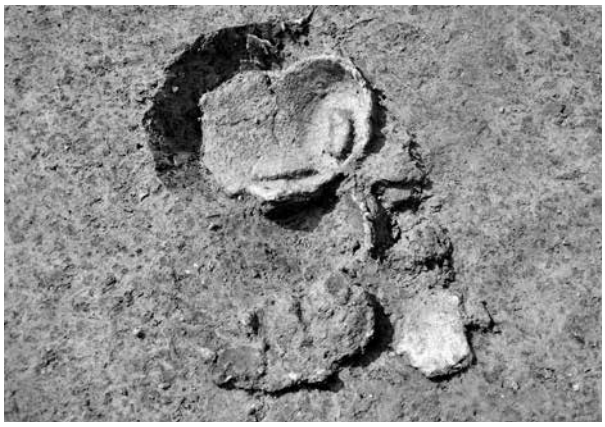
SK18 断面（西から）



SK19 断面（西から）

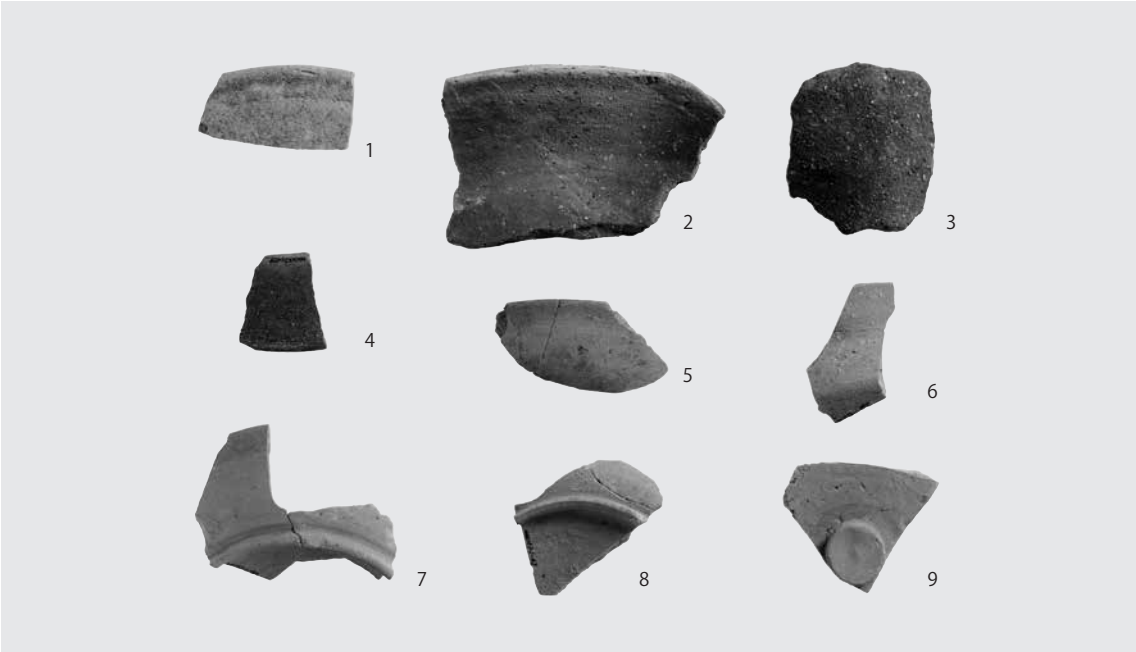
縄文土器出土状況（東から）

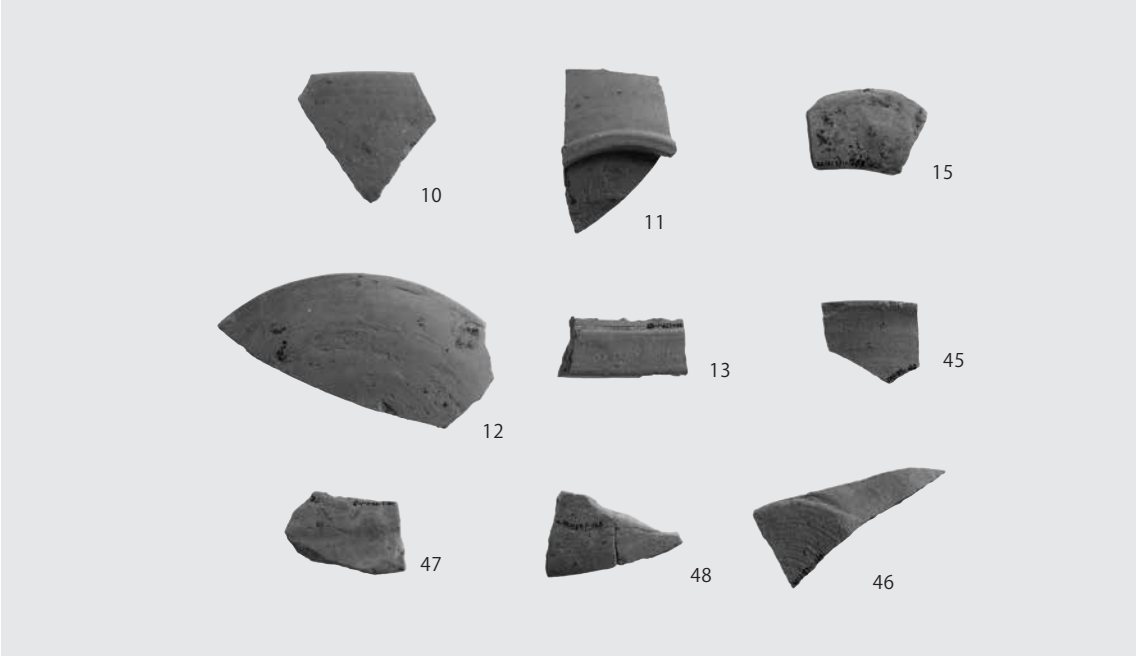
縄文土器出土状況　報 32（東から）



縄文土器出土状況　報 41（東から）

写真図版 13　遺物

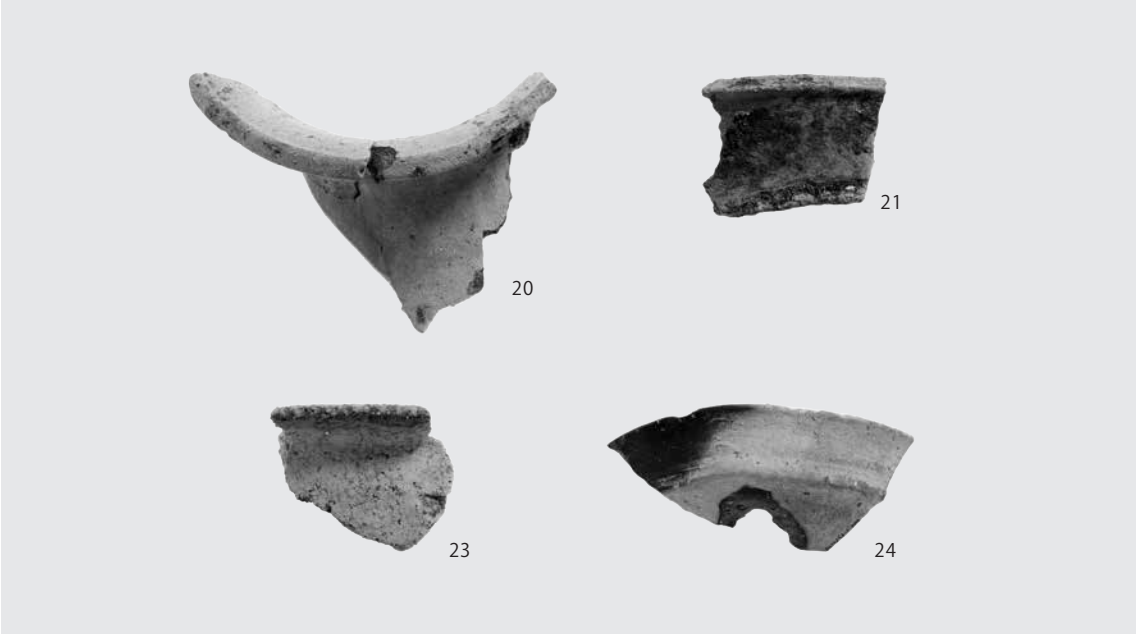




14

16

26


20
21
23
24

25
27
28

写真図版 15　遺物

22

49

50

51

22

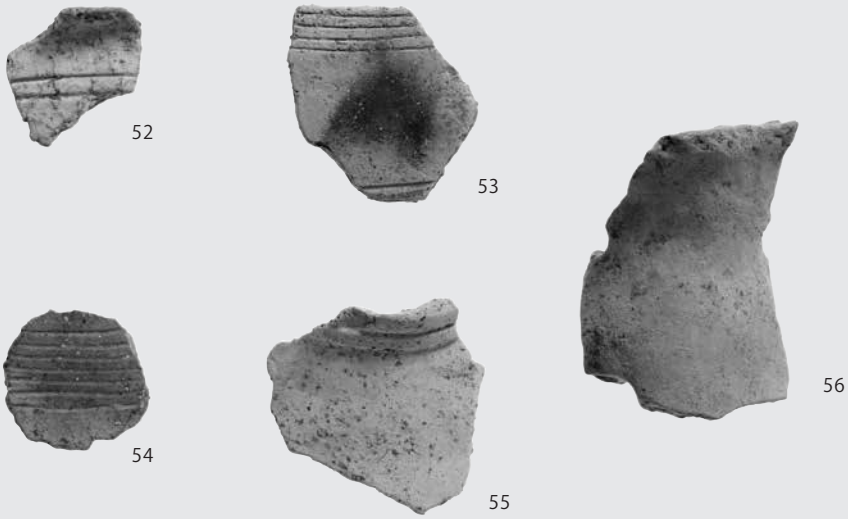
49

50

51

30

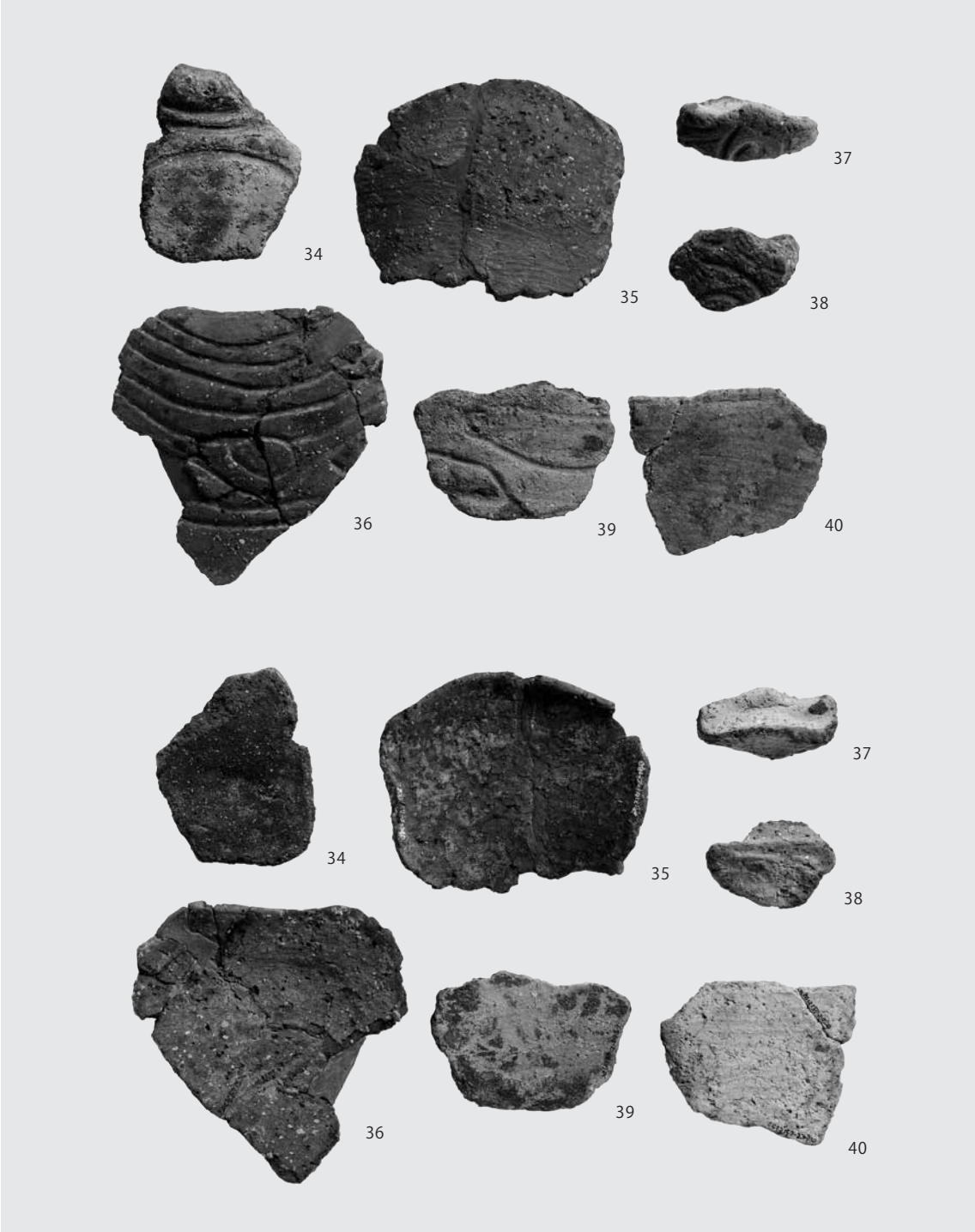
31


52
53
54
55
56

29

32

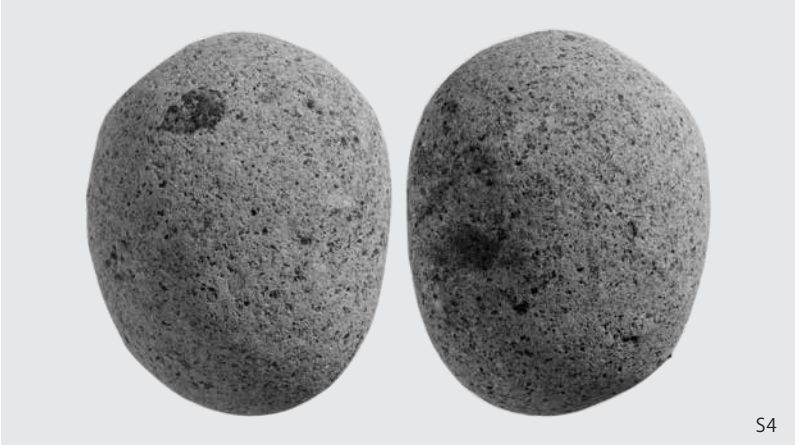
写真図版 17　遺物



S1

S2

S3


S4

S5

報　告　書　抄　録

ふりがな	よろやながせいせき
書名	丁・柳ヶ瀬遺跡
副書名	(都)網干線外街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第472冊
編著者名	鐵　英記、久保弘幸
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内)　TEL079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　TEL078-362-3784
発行年月日	平成27(2015)年3月25日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　TEL079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間(遺跡調査番号)	調査面積(㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
丁、柳ヶ瀬遺跡	姫路市勝原区丁	28201	20327	34°48′49″	134°35′55″	20120130(2011323) 20121204(2012158) 20130117～20130305(2012157)	6㎡ 4㎡ 167㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丁、柳ヶ瀬遺跡	集落	縄文時代		北白川C式土器	加曽利E式の影響を受けた個体を含む
		弥生時代	溝	弥生土器	
		古代～中世	柱穴	須恵器、土師器、白磁	

要約

縄文時代中期末を中心とする土器が確認された。北白川C式に該当するが、加曽利E式の影響が認められる。これまでの調査で、縄文時代中期の土器としては里木式系統の土器が確認されており、東西両系統の土器が発見されたこととなる。

弥生時代の遺構は溝1条であるが北側丘陵と集落の境界に位置したものである可能性がある。

古代～中世の遺構は柱穴と土坑であるが、特に古代の柱穴は根石を設置した大型のものが多く、大規模な建物の一部である可能性が高い。

兵庫県文化財調査報告　第４７２冊

姫路市

丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅲ

－（都）網干線外街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 27（2015）年３月 25 日　発行

編　集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
（兵庫県立考古博物館内）

発　行：兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目 10 番１号

印　刷：株式会社クレアチオ
〒672-8071　兵庫県姫路市飾磨区構４丁目 140 番地 baseA ビル